

博
多

一三九

— 博多遺跡群第一八六次調査報告書 —

はか
博 多 139
た

— 博多遺跡群第186次調査報告書 —



2010

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が多く残されており、これを後世に伝え残していくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の都市部における開発事業の増加に伴い、止むを得ず失われていく埋蔵文化財の発掘調査を実施し、失われていく遺跡の記録保存に努めているところであります。

本書は、博多遺跡群第186次調査の成果を報告するものであります。本調査では弥生時代から中世にかけての集落遺跡の一部を調査し、博多遺跡群の全容を解明するまでの多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が、市民の皆様の文化財に対する理解を深めていく上で活用されると共に、学術研究の分野でも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、費用負担をはじめとする御協力を賜りました株式会社三善住宅の皆様をはじめ、多くの方々のご協力とご理解に対し、心からの謝意を表します。

平成22年3月23日

福岡市教育委員会

教育長 山 田 裕 嗣

例　言

1. 本書は、福岡市博多区冷泉町400-2 外地内における共同住宅建設工事に先立って、福岡市教育委員会が平成20年度（2008年度）に実施した博多遺跡群第186次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆・編集には本田浩二郎があたった。
3. 本書に使用した遺構実測図・遺物実測図は本田が作成し、製図した。
4. 本書の遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北であり、真北より $6^{\circ}21'$ 西偏している。なお、本書に使用している座標は、国土地理院日本測地系を用いている。
5. 遺物実測図の縮尺は土器類を1/3に、銅錢を1/1に、金属製品等は1/2の縮尺に統一した。
6. 検出した遺構については、調査時に検出順に通し番号を付した。
7. 銅錢・銅製品・金属製品については、大庭智子が処理と整理の一部を行った。
8. 本書で使用した遺構写真は本田が撮影した。
9. 本調査に関わる記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理・公開される予定であるので、活用されたい。

本文目次

博多遺跡群の立地と環境	3
第一章 はじめに	5
(一) 調査にいたる経緯	5
(二) 調査体制	5
第二章 発掘調査の記録	6
(一) 調査の概要	6
(二) 基本層序	8
(三) 遺構と遺物	12
1. 各遺構面の概要	12
2. 井戸	20
3. 区画遺構（土坑・溝・掘立柱建物・柱穴列）	26
4. その他の出土遺物	49
a. その他の出土遺物	49
b. 墨書き器	49
c. 銅錢	54
第三章 まとめ	56

博多遺跡群の立地と環境

博多遺跡群は、中世都市「博多」を主として、弥生時代から近世、さらに近現代まで続く複合遺跡である。地理的には、玄界灘に面する博多湾岸に形成された砂丘上に位置し、西を博多川（那珂川）、東には江戸時代に開拓された石堂川（御笠川）、南は石堂川開拓以前に那珂川に向かって西流していた旧比恵川（御笠川）によって画されている。

博多遺跡群内の遺構の初現は、弥生時代前期後半の集落・壺棺墓である。これらの遺構群が検出される範囲は遺跡群の南半部に集中し、中期以降も活動領域は移り変わっていくが永続的に存続する。

古墳時代には砂丘面上に集落が広範囲に展開し集住が始まり、前方後円墳や方形周溝墓などが出現する。5世紀代には集落は縮小し、墳墓のみが点在する傾向を見せるが、6世紀代には堅穴住居の検出数は増加し、集落は再び盛行を見せる。

律令時代になると、御笠川の最上流地域に大宰府が設置され、九州の政治・軍事的中心地となる。また、博多湾岸には、博多遺跡群と入り海ひとつ隔てた西の丘陵上に、对外交渉の拠点として鴻臚館が置かれた。博多遺跡群内に官衙そのものが設置されたという文献記録はないが、石帶・銅製帶金具・墨書き須恵器・須恵器鏡・皇朝鏡・鴻臚館式瓦・老司式瓦などの特殊な遺物が数多く出土し、遺跡範囲南部に東西・南北方向の溝が一方一町の規格性をもって掘削される。これら遺構は律令官人とそれに伴う支所施設等に関連するものと推定される。

平安時代後期になり律令体制が弛緩すると、对外貿易の管理も中央政府の直接的な管理・掌握から、大宰府を通じての管理に変更し、大宰府官人による蓄財のための私貿易の拡大をもたらす。このような時勢の流れの中で、11世紀には博多において宋商人らの居留が本格的に始まる。博多遺跡群が本格的に繁栄・展開するのは11世紀後半に入ってからで、埋め立てによる居住域の拡大が開始され、該期の膨大な量の輸入貿易陶磁器などが出土することから流通形態が確立した時期と考えられている。さらに、12世紀末から13世紀前半にかけては、聖福寺・承天寺が博多在住の宋商人綱首の援助のもとに、相次いで建立され周辺の都市化が急速に進行し、遺跡縁辺では筥崎宮周辺に展開する箱崎遺跡や住吉神社遺跡と共に中世都市群として有機的に発展したことが調査成果より知られている。

鎌倉時代には、二度にわたる元寇で博多付近一帯は戦場となり一旦は荒廃するが、13世紀末には鎮西探題が博多に設置され、博多は貿易の中心地だけでなく、九州の政治的中心地という役割を持つようになる。調査成果から13世紀末から14世紀初めにかけて、各所に道路遺構が整備されはじめ、それらは戦国期まで補修を繰り返しながら存続することが分かっている。これらの道路・街区は必ずしも統一された規則性を持つわけではないが、中世後半期の博多の都市景観はここに確立されたといえる。

室町時代後半の博多は堺と並んで自治都市として有名であったが、度重なる兵火によって焼失する。この時期に博多遺跡群南端には房州騒が設けられ、1586年には中国の毛利氏の軍と対峙した薩摩の島津氏によって焼かれ再び灰燼と帰する。しかし、翌年には豊臣秀吉によって復興される。これが太閤町割であり、この時点で鎌倉時代以降続いている博多の街区・道路のほとんどは廃止され、博多全体は長方形街区と短冊形地割で再整備され、中世都市博多は近世都市博多として再生された。江戸時代の鎖国政策で貿易都市としての博多は幕を下ろし、商人町博多として明治維新を迎えたのである。

昭和52年の高速鉄道（地下鉄）の調査より始まった博多遺跡群の発掘調査は、平成22年3月現在、第189次調査（地下鉄・築港線を含めると223次）を数える。博多駅新規開業を控えて公共事業を原因とする大規模な開発から民間主導の小規模な開発へと転換期を迎えていたが、中世都市「博多」は「記録保存」という名の破壊と引き換えに当時の様相を着実に明らかにしつつある。

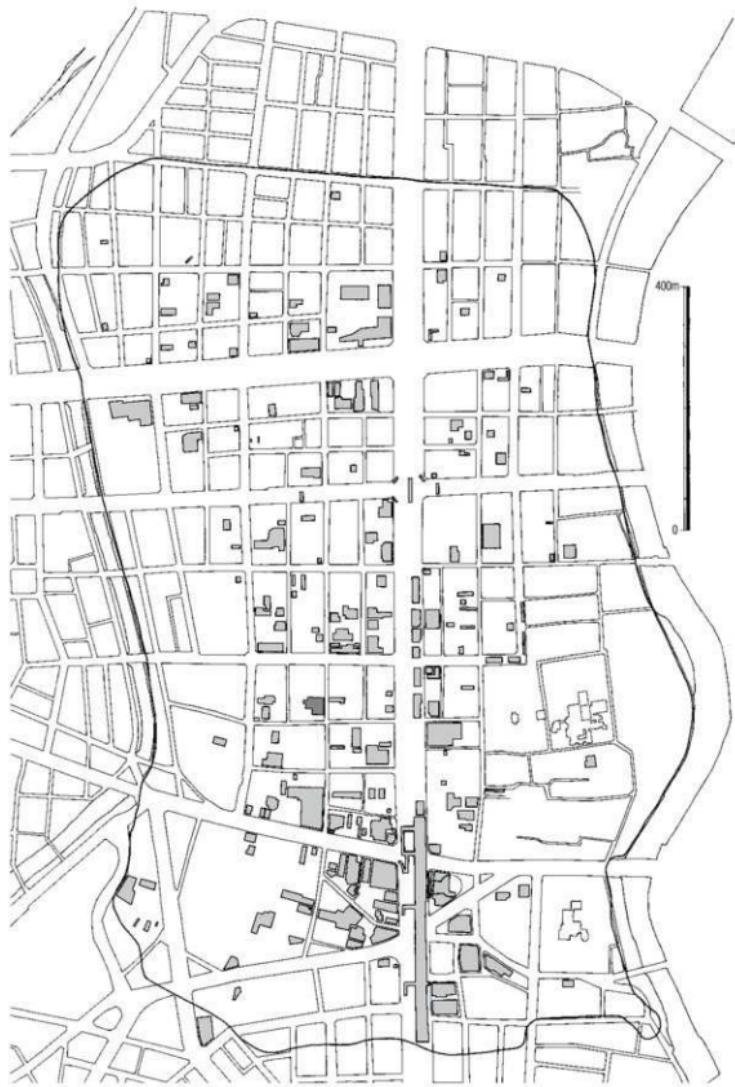


Fig. 1 博多遺跡群内調査区位置図 (S=1/8000)

第一章 はじめに

(一) 調査にいたる経緯

平成20年5月22日、株式会社三善住宅より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、博多区冷泉町400-2外地内における共同住宅建設予定地内に関しての埋蔵文化財の有無についての照会（審査番号20-2-146）が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群の中央部に位置しており、申請地の周辺では数次の発掘調査がこれまでに行われていることから、申請地内においても良好に遺構が存在していることが推測された。これを受け埋蔵文化財課は平成20年6月19日に現地での試掘調査を行った。その結果、現地表面から150~200cmほど掘り下げた暗黄褐色土層面上において中世から近世にかけての井戸、土坑などの遺構と該期の遺物の存在を確認した。これらの遺構は濃密に遺存しており、建設工事に伴う基礎工事によって遺跡の破壊は免れないため、工事によって止むを得ず破壊される部分については全面に発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。

発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行うこととなり、平成20年10月1日に着手し、同年12月18日に終了した。

(二) 調査体制

調査委託	株式会社三善住宅	代表取締役	冬野 勝美			
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	山田 裕嗣			
調査総括	同	文化財部 部長	矢野三津夫			
			宮川 秋雄（現任）			
	同	埋蔵文化財第1課 課長	山口 讓治			
			濱石 哲也（現任）			
	同	埋蔵文化財第1課 調査係長	米倉 秀紀（現任）			
調査庶務	同	文化財管理課	古賀とも子			
			山本 明子			
調査担当	同	埋蔵文化財第1課 事前審査係	藏富士 寛（事前審査）			
		調査係	本田浩二郎（本調査）			
調査作業	石川 洋子	上野 照明	大庭 智子	小野 千佳	小野山次吉	片岡 博子
	唐島 栄子	許斐 拓生	草場 恵子	坂下 達男	渋谷 一明	清水 明
	田中トミ子	豊丸 秀仁	永田とみ子	中村 桂子	野口リウ子	服部 弘勝
	濱地 静子	林 厚子	北条こずえ	村山巳代子	山下 智子	結城フヂコ
整理作業	松下伊都子	宮崎由美子	吉盛 泉			

遺跡調査番号	0840	遺跡略号	HKT186
調査地番	福岡市博多区冷泉町400-2外	分布地図番号	千代・博多48
開発面積	426.70m ²	調査面積	120.05 m ²
調査期間	2008.10.01~2008.12.18	調査原因	共同住宅建設

調査期間中には福岡市教育委員会埋蔵文化財第1・2課の同僚諸氏からは多くの助言を頂いた。深く感謝する。

第二章 発掘調査の記録

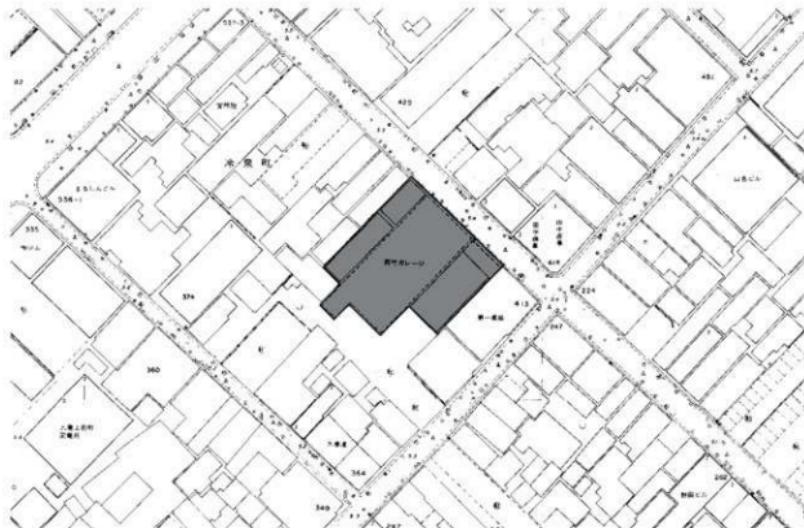
(一) 調査の概要

博多遺跡群は、福岡平野北側の博多湾岸に位置し、那珂川と御笠川（石堂川）の河口に挟まれた三角州平野上に形成された遺跡群である。博多遺跡群の立地する砂丘地形は、南から大きく「博多浜」と「息浜」の二つに分けられ、「博多浜」はさらに二つの砂丘に細分される。現在の「博多」の街並みは、この砂丘地形上に人工的な整地層が2m以上盛り土されて形成されたものであるが、現状でも埋没した旧地形の起伏を比較的よく反映している。

今回報告を行う、博多遺跡群第186次調査地点は博多遺跡群範囲内の中央部東側に位置する（Fig.1参照）。この付近は博多遺跡群南側に展開する博多濱砂丘の北西部に相当する。周囲の発掘調査では古墳時代から中世にかけての遺構や遺物が検出され、古代以降活発に集落が営まれていたことが判明している。なお、本調査は冷泉町4区東側街区での初めての発掘調査となる。調査はオープンカットによる掘り下げ方法を探ったため、周囲建物に対して安全帯を設け掘削を行い、壁面については法面を十分に設定して安全対策を行った。これにより調査区は三分割して設定することとなり、1区表土掘削より着手した（Fig.3参照）。

調査は事前の試掘調査成果及び調査中の土層断面観察により4面の遺構面を任意に設定して掘り下げを行った。試掘調査の成果では現地表面から150cmほど掘り下げた暗灰褐色土層面上で遺構が検出されており、これに基づいて調査着手以前に近世から現代までの整地層を掘削し、遺構検出を開始した。調査では、弥生時代中期の土坑を初現として、古代から中世まで存続する大溝、中世の廃棄土坑や井戸遺構、不定形土坑、柱穴群などの遺構と数cm単位で行われた整地土層面を検出した。

遺物は弥生土器、古式土師器、須恵器、土師器、縄文陶器、瓦器、貿易陶磁器、国産陶器、銅錢、獸骨、巡方等の銅製品などがコンテナケース54箱分が出土した。



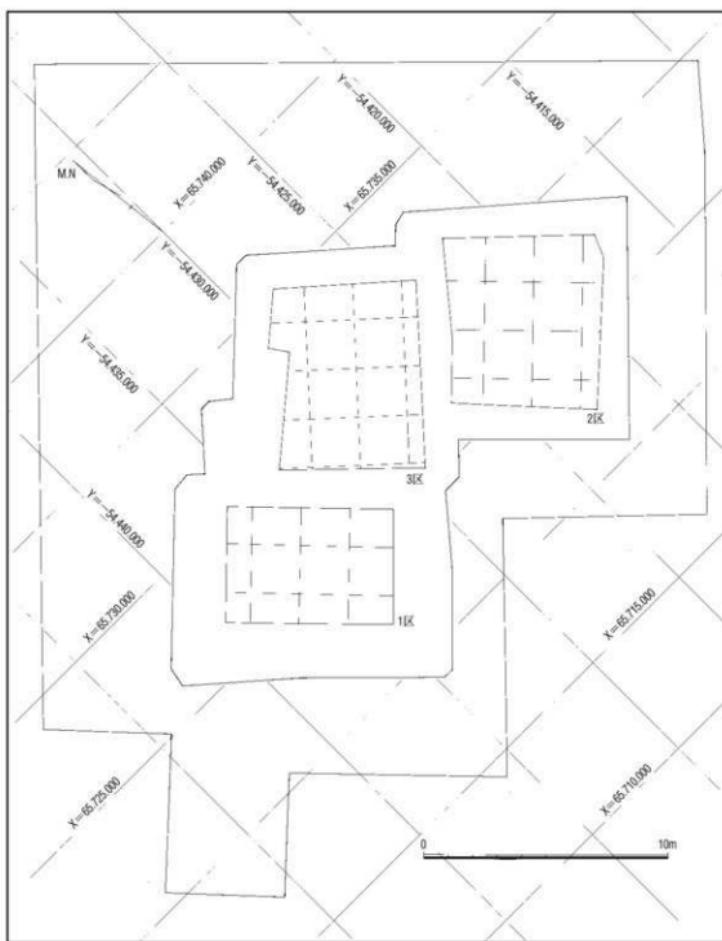


Fig. 3 調査区位置図 (S=1/200)

博多遺跡群内での発掘調査は、基盤層である砂丘面が2~5mと深く軟質の砂質土壌であるために安全確保が難しい。多くの場合は建設工事に先行して行われる鋼矢板等を用いた土留め工事範囲内について調査を行う。しかしながら、今回は先行する土留め工事及び現地表面から調査開始面までの堆積土の場外搬出などを実施しなかったため、建設工事予定範囲を三分割して設定している。また、周囲建物への影響を及ぼさないようにという配慮から調査区周囲に安全帯を設け、調査区壁面については法面を十分に設定したことから、実際の調査範囲（各調査区第4面遺構面の合計面積）は約120m²と要調査範囲の28%について行ったに過ぎない。

(二) 基本層序 (Fig-4~6)

第186次調査地点は、博多遺跡群が立地する砂丘の南側列（博多演）の北西端部に位置している。正確には南側砂丘列は更に二つの砂丘に細分され、本調査地点はこの内の北側砂丘上に位置している。

これより報告を行う各遺構面の他にも整地面が確認されたが、調査では主要な遺構の平面形が明確に検出された層位を遺構面として設定し、各整地面は土層断面上で記録するに留めた。本調査地点の現地表面の標高は5.70～5.90m前後を測り、現況では北東側に緩やかに傾斜していた。

試掘調査の成果より、第1面は標高3.80～3.60m前後の暗黄灰褐色粘質土の整地土層を鍵層として設定した。この整地層は主に1区南側で検出され、これ以外の部分では暗褐色土層面上で遺構面を設定している。第2区表土掘削時には東側土層断面の標高4.30～4.50m付近の位置で、厚さ20cm程度の焼土層が確認された。この層位は断片的ではあるが調査区全体に堆積していることが確認できる。この層位中から掘り込まれた遺構群は16世紀代以降のものが多く、これらの遺構の主軸方向は現在の町割りの主軸と同一方向を探ることが確認されており、これ以前の遺構とは連続性が見られない。太閤町割による町割再編の契機となった島津氏の焼き討ち（1586年）による焼土層と見られる。

第1面調査終了後に1・2区では部分的に20cm程度掘り下げ作業を行い、標高3.6m前後で遺構面を設定し上面で検出した溝遺構などの調査を行った。この調査面は3区では土層断面の観察からは明瞭に分層できなかったため設定していない。

第2面は標高3.5～3.2m前後で検出される暗褐色粘質土～暗褐色砂質土層面上で設定した。1区では部分的に整地に用いられた黄褐色粘質土が検出されるが、後世の遺構の掘り込みによって断片的なものとなる。2区・3区では暗褐色砂質土層上面を遺構面として遺構検出を行った。

第3面は標高3.0～2.5m前後の暗褐色砂質土層面上で設定した。遺構面は南側に緩やかに傾斜しており、基盤層である褐色砂層面の地形を反映していることが判明した。1区北側隅部では基盤層の砂丘面が標高3.0m付近から一部確認され、2区東側でも標高3.0m付近で砂丘層を確認している。この第3面とした暗褐色砂質土層は弥生中期～古墳時代・古代の遺物を含む包含層もあり、掘り下げ時には弥生土器・古式土師器・須恵器・土師器・貿易陶磁器などの遺物が出土する。復元地形より調査区東側高位部分から整地土とともに流入した遺物と考えられる。

第4面は標高2.5～2.0m前後で検出された博多遺跡群の基盤層である褐色砂層面上で設定した。砂層は南西側に向かって緩やかに傾斜しており、調査区が砂丘南側の緩斜面上に位置することが分かる。1～3区にかけて検出される溝遺構（SD-81・145・301）の北側肩部分では埋没当初の段階に堆積した風成砂層が土層断面で確認され、砂丘背面の風誇を受けない立地であったことが分かる。

なお、本調査地点での涌水は、近辺の調査区と同様に基盤層である褐色砂層から1mほど掘り下げた標高1m前後の地点で認められた。



Ph. 1 1区南壁土層断面（北西から）



Ph. 2 1区西壁土層断面（北東から）

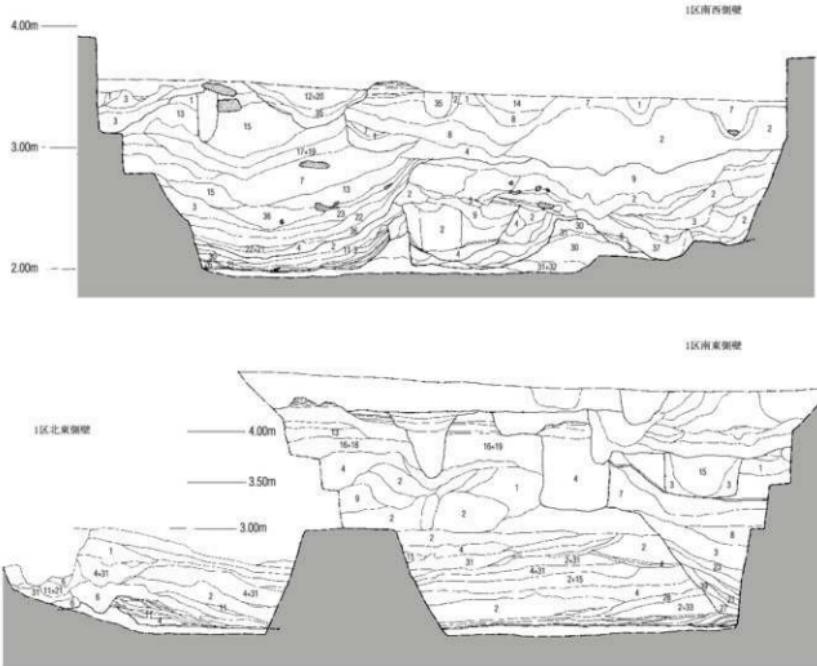


Fig. 4 第1区土層実測図 (S=1/50)

博多遺跡群第186次調査 土層図注記

- | | | |
|-----------------|-------------|-------------------|
| 1. 暗褐色粘質土 | 14. 黒褐色粗砂質土 | 27. 黑褐色細砂 |
| 2. 暗褐色砂質土 | 15. 黑褐色土 | 28. 暗灰褐色砂質土 |
| 3. 黑褐色粘質土 | 16. 暗褐色土 | 29. 硬混じりの粗砂 |
| 4. 黑褐色砂質土 | 17. 暗黄褐色土 | 30. 暗褐色細砂 |
| 5. 黑褐色砂 | 18. 灰色粘土 | 31. 暗褐色粗砂 |
| 6. 暗褐色砂 | 19. 灰白色粘土 | 32. 砂礫 |
| 7. 暗褐色土+黃褐色粘土・少 | 20. 烧土ブロック | 33. 鉄分沈着層 |
| 8. 暗褐色土+黃褐色粘土・多 | 21. 暗褐色粘土 | 34. 粗砂混じりの暗黄褐色砂質土 |
| 9. 暗茶褐色砂質土 | 22. 暗褐色砂 | 35. 暗黄褐色粘土 |
| 10. 暗褐色細砂 | 23. 暗褐色粘質土 | 36. 黑褐色粘土 |
| 11. 暗褐色砂 | 24. 暗灰褐色粗砂 | 37. 暗褐色砂質土+織状細砂 |
| 12. 黄褐色粘土 | 25. 暗茶褐色砂 | 38. 黄褐色粘土ブロック |
| 13. 暗褐色粘質土 | 26. 暗灰褐色砂 | |

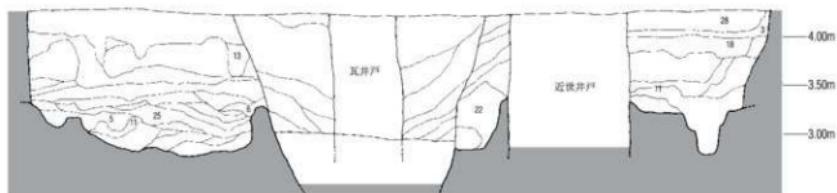


Ph. 3 1区西壁土層断面・部分（北東から）

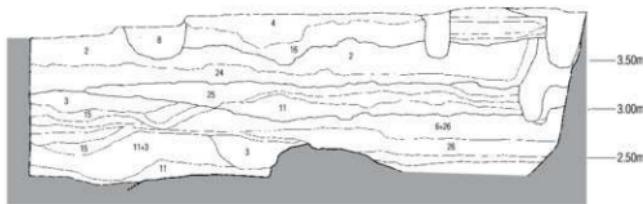


Ph. 4 2区南壁土層断面（北西から）

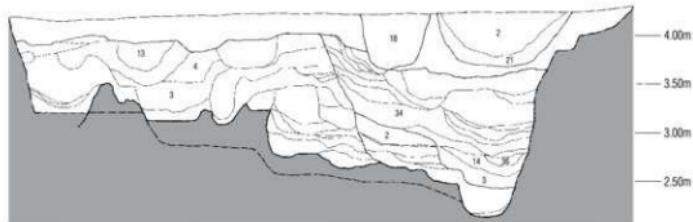
2区南側壁



2区北西側壁



2区南西側壁



2区北側壁

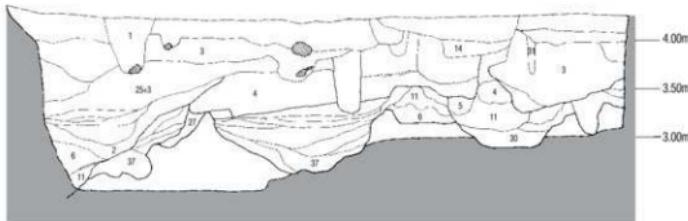


Fig. 5 第2区土層実測図 (S=1/50)

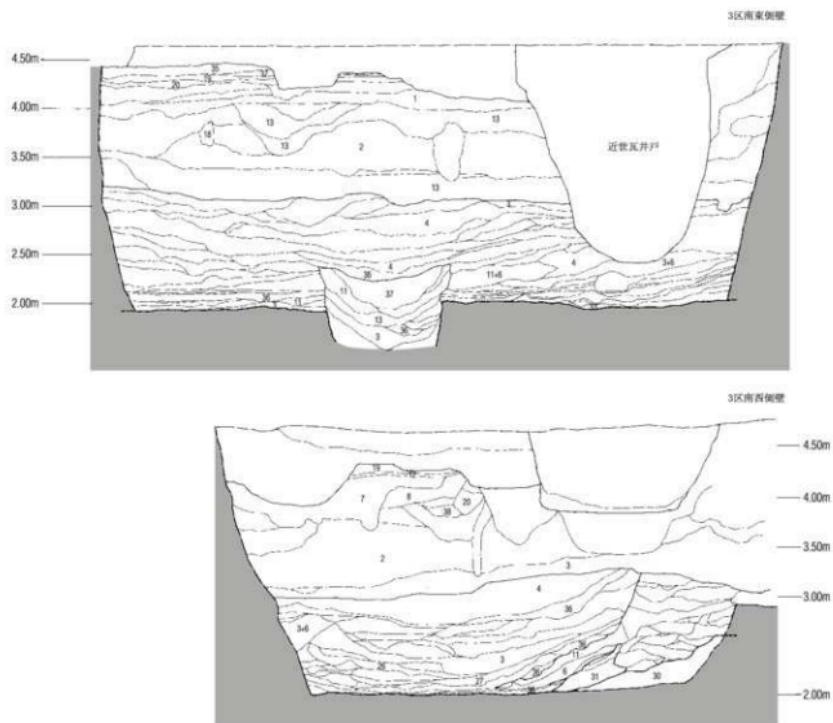


Fig. 6 第3区土層実測図 (S=1/50)



Ph. 5 3区西壁土層断面（北東から）



Ph. 6 3区西壁土層断面・部分（北東から）

(三) 遺構と遺物

前述のようにオープンカットによる掘り下げ方法を採ったため、要調査面積426.70m²のうち120.05m²についてのみ調査を行ったにすぎない。調査区は排土置き場の確保や安全対策から三分割して設定し、1区表土掘削より着手した。各遺構面の調査後は、試掘調査の成果と調査時に行ったトレーニングでの土層観察により遺構面を設定し、順次掘り下げを行っている。大別して第1面下掘り下げ時には中世後半期、第2面下掘り下げ時には中世前半期、第3面下掘り下げ時には古墳時代から古代にかけての遺物が出土しており、各遺構面の時期と包含層形成時期を把握する上で重要な資料である。

本調査での遺構の初現は第2区第4面検出の弥生時代中期末の土坑（SK-174）であり、遺物としては弥生土器甕の破片が数点出土している。なお、本調査区東側で行われた第162次調査では、褐色砂層面上で弥生時代終末期～古墳時代初期の甕棺墓1基が検出されており、砂丘地形形成後間もないこの時期から墓域等の生活領域として利用されていたことが分かる。

以下に各調査区・各遺構面の概要と各遺構面で検出した遺構についての説明を行う。

1. 各遺構面の概要

<第1面> (Fig.7)

試掘調査の成果より基盤層の砂丘砂層が一番落ちて深いと予想された西側部分の1区より着手した。表土掘削は110m²の範囲で行ったが、壁面養生のため法面を十分に確保したため調査面積は33m²となり最下層の第4面は18m²程度の調査となった。現地表面の標高は5.80m前後で、基盤層となる褐色粗砂層の標高は2.00m程度を測る。1区第1面は標高3.8～3.6m付近で検出される暗黄灰褐色粘質土の整地層面上で設定した遺構面である。試掘成果に基づいて設定した遺構面であり、遺構面の時期としては概ね14世紀代と考えられる。第1面での遺構検出は黄灰褐色土の整地層面（1面-1）を鍵層として行ったが、1区南側では灰褐色土による整地土層面は検出されず、部分的に下層の黄褐色粘質土による整地層面を検出しており、その整地面上において遺構検出・掘り下げを行った。

第1面では、土坑・溝状遺構などの遺構を検出した。これらの遺構の中には現在の街区方向と同方向の主軸（N-52°-E）を持つものがある。現在の「博多」の街並みは基本的には太閤町割によって整理された街区を踏襲したものであり、16世紀末以降現代まで続く景観である。

遺構の多くはほぼ同一主軸（N-67°-E前後）を探る。この主軸方向を探る遺構群は博多跡群の西側でよく検出されており、これらの遺構群の時期は14世紀代と考えられる。第1面直下では並行する溝（SD-16・30）が2条検出されたが、これらも同一方向の主軸を探る。溝の間隔は1.50m程度を測り、両溝間では一部砂と粘土の非常に縮まった道路状の硬化面が検出されるが、検出された範囲では道路遺構とは認定しがたい。溝はいずれも幅70cm程度で西側に向けて深くなっている。

第2区は調査対象範囲内南側で設定した。第1区の成果に従い標高4.0m付近までは重機により掘削を行った。表土掘削は排土置き場を確保する関係から100m²程度の範囲について行った。2区第1面でも第1区で見られた主軸方向を探る遺構群を検出した。方形土坑・並列溝遺構ともにほぼ同軸をとるもので、14世紀代の区画を示すものと考えられる。

第3区第1面についても標高4.0m付近で設定した。検出した遺構としては方形土坑・柱穴列が主であり、この柱穴列と平行に走る溝（SD-205等）を確認した。建物に伴う雨落溝の可能性を考えられる。遺構面の年代は14世紀代であるが、遺構の一部（SK-230）は太閤町割から続く現在の町割りと同一主軸方向を探る。これらの遺構は出土遺物より16世紀末以降のものと考えられ、標高4.20m付近に堆積する厚さ15cm後の焼土層前後から掘削されている。

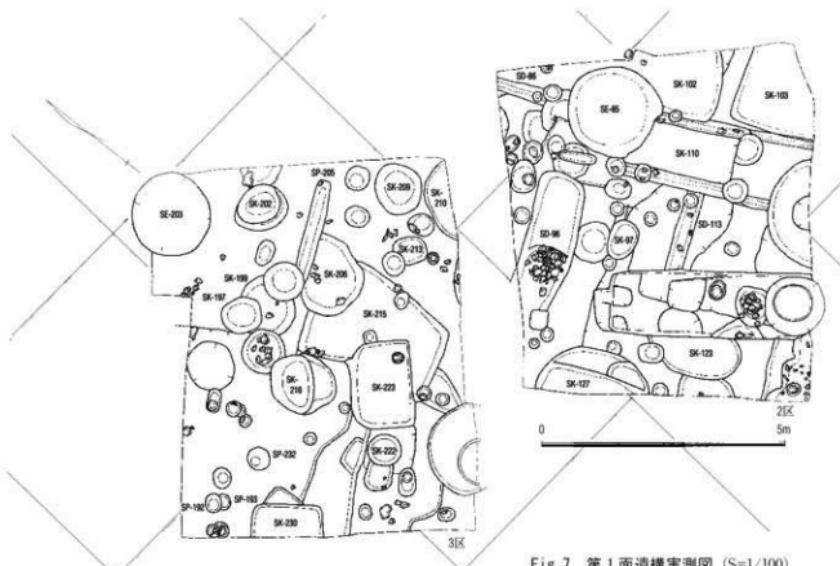
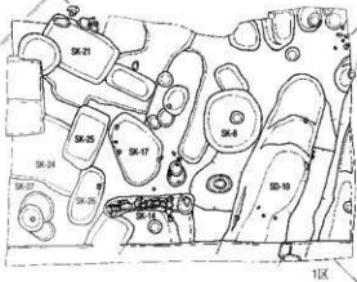


Fig. 7 第1面造構実測図 ($S=1/100$)



Ph. 7 1区第1面造構検出状況（南西から）



Ph. 8 2区第1面造構検出状況（南東から）



Ph. 9 3区第1面造構検出状況（北東から）

<第2面> (Fig. 8)

1区第2面は標高3.30m前後で設定した造構面で、砂礫混じりの暗褐色土層を主体とする。方形土坑・溝造構・柱穴列等の遺構群を検出した。柱穴底面には扁平な礫を据えるものが多く、掘立柱建物の基礎構造と考えられる。第2面で検出した造構も上面に引きつづき同一主軸方向 (N-67°-E前後) を採るものが多い。SK-51・SK-47とした方形土坑もこの主軸方向で掘削されたもので、柱穴列で構成される建物に伴う半地下式土倉などの用途が考えられた。これらの方形土坑は壁面に白色粘土を薄く塗り広げて壁面の補修・補強を行ったものが多い。造構面としては2・3区と比べて西側方向へ傾斜する旧地形を反映してやや深くなっている。

2区第2面でも第1面に引き続き、区画溝と考えられる溝造構の一部 (SD-146・157・161) と土器類廐棄土坑 (SK-137)などを検出した。第1面から第2面への掘り下げ時には区画溝 (SD-86・104・109) に直交・並行する整地土の単位が検出された。建物の建て替えにあたっても区画を大きく変えず、既存の街割りに従って補修等を継続的に行っていったことが推測される。造構面は暗褐色粘質土を主体とするが、部分的には砂質土を用いた整地層となる。造構埋土は焼土を多く含む暗褐色粘質土であるものが多い。2区第2面とした造構面の標高は3.50m～3.70m前後で、わずかに南側方向に傾斜する。

検出された造構の多くは概ね13世紀に属するものと考えられるが、一部には11世紀後半代のものも含まれる。2区第2面では造構としては検出されてないが、8世紀の須恵器や古墳時代の土器等が掘り下げ時に出土している。2区ではほぼ全面にN-67°-E前後方向の主軸を採る造構群が展開する。2区南端ではこの主軸方向を採る直線的な落ち (SK-135) 等も検出される。これに対し1区では調査区北半部の柱穴列以北ではこの主軸を採る造構群は確認されず、屋敷地・長屋等の敷地北端部付近または庭などの空隙地帯を検出した可能性が考えられる。

3区第2面でも上面に引き続き柱穴列 (SB-309・310) を確認した。柱穴列は90cm前後の間隔で並び、これに直交する柱穴列も検出される。柱穴内には人頭大から拳大の扁平な礫が根石として据えられる。建物としてまとめきれない柱穴群も検出されており、2区の調査成果と同様に同一の町割の建物建て替えの所産と考えられる。

この面で検出される土坑 (SK-245・277) も柱穴列に直交または並行する主軸N-67°-E前後を採る。これらの土坑の埋土は焼土・炭化物を多量に含む暗褐色粘質土となる。この他にはSK-219・262・267等の楕円形土坑などを検出した。これらの土坑は長屋建物などに伴って掘削された廐棄土坑の類と考えられる。SK-262とした土坑からは銅鏡2枚が土器器壊などともに出土している。

SK-277とした土坑は底面が博多遺跡群の基盤層である砂丘砂層面に既に達しており、検出された砂丘砂層面の標高は2.80m前後となる。2区でも同程度の標高で砂丘砂層の一部が確認できるが、1区では2.40m付近で砂層が確認され、その比高差は40cm弱となる。わずかではあるが基盤層全体が南西方向に向けて緩やかに傾斜している状況が確認できる。3区第2面とした造構面の標高は3.50m付近で、時期としては概ね13世紀代と考えられる。

第2面全体を概観してみるとN-67°-E前後方向を基軸とした町割の一端を確認し、その時期は概ね12世紀代から13世紀代の年代であることが分かる。

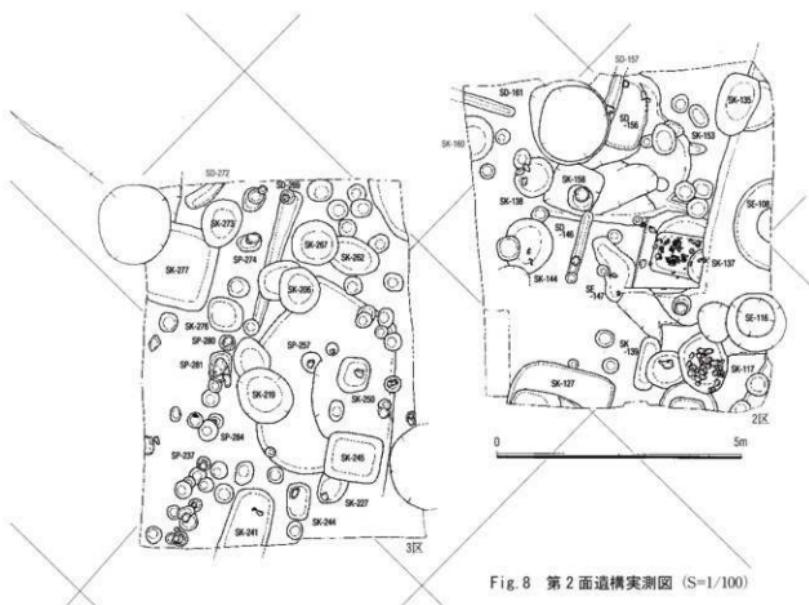
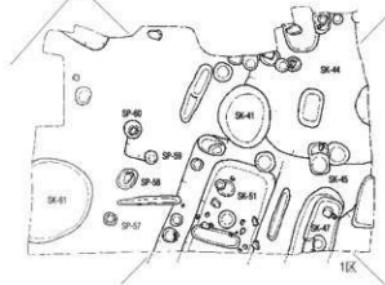


Fig. 8 第2面遺構実測図 (S=1/100)



Ph. 10 1区第2面遺構検出状況 (北東から)



Ph. 11 2区第2面遺構検出状況 (南西から)



Ph. 12 3区第2面遺構検出状況 (北東から)

<第3面> (Fig. 9)

1区第3面は2.70m前後で設定した。調査区北側では基盤層となる褐色砂丘砂層面が一部検出された。第3面中央部から南側では廃棄土坑と思われる円形土坑 (SK-69・70・72) と方形土坑 (SK-66・68)などを検出した。出土遺物より遺構面の時期は12世紀代中頃から後半と考えられる。

調査区北側の遺構面は基盤層となる褐色砂層を主体とするが、部分的に縞状の汚れが入る褐色砂層となる。この褐色砂層は褐色粗砂・暗褐色シルト細砂が細かく互層になって堆積しており北側海岸方向からの風成砂層と考えられる。この堆積層はおもに遺構面上にある起伏の南側背面に形成される。調査区南側の遺構面は溝の埋土中層であるため、黒褐色粘質土層となりこの層位上面で遺構検出を行った。第3面への掘り下げ時には8世紀代から9世紀代の須恵器片などがまとまって出土したが、1区ではこの時期の遺構は検出されなかった。

2区第3面では上面で検出・確認されなかつた複数の井戸遺構を調査区中央部付近で検出し、掘り下げを行った。これらの井戸は11世紀後半から12世紀代のもので、井戸掘方埋土からは土師器・白磁碗等が出土する。SE-172とした井戸遺構は直径2.50m以上の円形の掘方を持ち、掘方底面中央に井筒を据える。井筒には結桶2個体以上を転用して使用する。SE-188とした井戸の掘方内からは弥生時代終末期の壺がつぶれた状態で出土した。このSE-188とした井戸自体は11世紀代のものであり、井戸造営時に該期の遺構 (SK-187) を掘り抜いたものと考えられる。

第2区では井戸遺構6基（内3基は近世以降の瓦戸のため完掘していない）、廃棄土坑 (SK-170・171等)・方形土坑 (SK-169)・溝遺構 (SD-185)などを検出した。SK-169とした方形土坑は上面に引き続きN-67°-E前後方向の主軸を探る遺構で、暗褐色砂の埋土を持つ遺構である。この遺構に重複するように井戸が掘削されているため、調査区内では全容は把握しきれなかった。

2区の調査全体で出土した遺物は15箱程度であるが、基盤層となる砂丘砂層上面からは弥生中期末の高坏坏部片などが出土しており、比較的早い段階から博多濱北側部分も活動領域として取り込まれていたことが窺える資料となる。この他にも弥生時代終末期から古墳時代初頭の甕棺に使用されたと考えられる大甕の突底部片などが井戸埋土から出土している。周辺で行われたこれまでの調査成果からも該期には、調査区一帯が集落・墓域等の生活領域として利用されていたと考えられる。

3区第2面以下では調査区南側が鍵層となる堆積層がSD-301とした溝遺構により大きく乱れていたため、南側の一部については大きく掘り下げる第3面を設定した。3区第3面とした遺構面の標高は3.00~2.50m付近を測り、SD-301とした溝がある南側では一段深い遺構面を設定している。

前述のように第1区 (SD-81)・第2区 (SD-185) で一部を検出した溝遺構 (SD-301) が調査区南半部を占めるため、調査区北側半分で井戸・土坑などを検出した。井戸 (SE-269・297) はいずれも結桶を井筒に転用しており、埋土からは11~12世紀代の白磁などが出土した。溝の埋土上面から掘り込まれる柱穴群 (SP-286・287等) は出土遺物より12世紀末から13世紀前半代の時期が考えられる。また土層断面の観察からも溝自体は12世紀後半には完全に埋没していたものと考えられ、柱穴が掘削された13世紀代初頭には溝としての機能は完全に失われ生活領域の一部として使用されていたことが分かる。埋没後も周囲の区画に大きく影響を残していたことは、1・2面の調査で検出された遺構群の主軸からも推測できる。

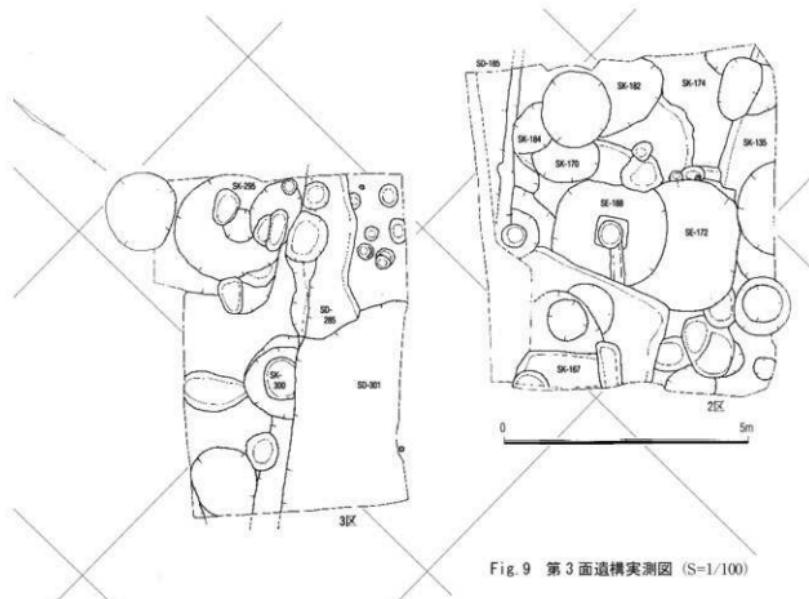
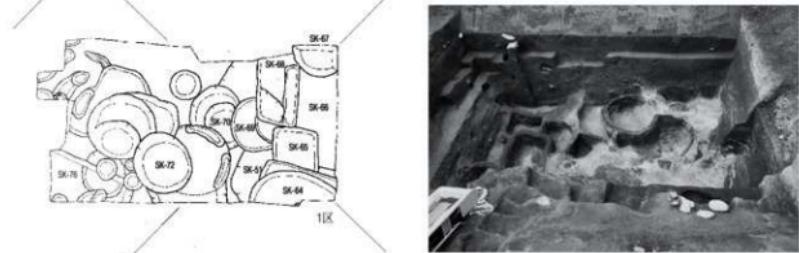


Fig. 9 第3面遺構実測図 (S=1/100)



Ph. 13 1区第3面遺構検出状況（北東から）



Ph. 14 2区第3面遺構検出状況（北西から）



Ph. 15 3区第3面遺構検出状況（南から）

<第4面> (Fig.10)

1区第4面は調査区南側を中心として設定して掘り下げを行った。土層断面で確認したところ砂層に切り込む形状で幅2m以上の溝が調査区南側に存在することが判明した。1区には溝の北側側面の一部がかかるのみで全容は判然としないが、断面形は逆台形を呈し底面はほぼ平坦となることがわかる。溝の底面には3cm程度の黒褐色粘質土が薄く全面に堆積している状況が観察できる。第1区とした調査区全体では12箱程度の遺物が出土した。

2区第4面では調査区北側で溝遺構南側の肩 (SD-185) を掘り下げて確認した。他の調査区では検出されなかつたが、溝の落ち際に30cm程度の間隔で打設された杭列が確認された。2区第4面では上面で検出されていた井戸遺構の完掘を行った。各井戸遺構は結構を井筒として転用して使用している。井戸掘方の平面形は円形～楕円形を呈し、直径1.50～2.50m前後を測る。井筒は掘方底面の中央部付近に設置されるが、掘方底面は大きく平坦面を設けるものと井筒の径よりわずかに広い程度の底面とする形態の二種類に分けられる。時期的には近接するものであるため、井戸を掘削する工人集団の差異を示すものであろうか。

第3面の項で前述したように、2区では弥生時代終末期前後の土器が集中して検出される。後世の遺構群により正確な平面形は不明確なものとなっているが、住居であった可能性が考えられる。

3区第4面は標高2.50m前後を測る基盤層の砂丘砂層上で設定した。上面と同様に南半部は溝遺構 (SD-301) となるため主に調査区北側で方形土坑 (SK-307・住居か) と円形土坑等を確認した。調査区の大半を占める溝遺構は上面で検出される遺構群とほぼ同一方向であるN-63°～65°-Eの主軸方向をとる。溝側面北側には風成砂の交互堆積層が形成されており、砂丘南側斜面の鞍部等の地形を利用して溝を掘削したものと考えられる。標高2.00m付近を測る溝の底面は平坦面となり、土層断面の観察から断面形は逆台形となる。各区で検出された各部位から上面での幅は3.50～3.00m程度、深さは1.20m程度であることが分かる。出土遺物より溝自体の掘削は8世紀代と考えられ、埋没しながら400年近くこの一帯を区画する施設として存続していたことが分かる。また、底面直上には黒色粘質土が全体にわたって5cm程度堆積しており、掘削当初から供用開始時点にあたって帶水環境となっていたようである。溝の用途としては付近一帯の基幹となる区画溝と考えられるが、延伸方向や周囲の調査成果からは溝の延長方向に相当するものは確認されておらず今後の検討を要する。

この大溝の掘り下げ途中に井戸遺構を検出した。標高2.30m付近で確認できた井戸の掘方は、多角形を成しており溝が30cm程度埋没した時点で掘削されていた。溝底面での遺構検出時には八角形の平面形が確認されたため、慎重に掘削を行ったが井側自体は腐食のため消滅しており、側板として使用された板材等の痕跡は確認できなかった。井筒として曲物が転用して使用されたものと考えられる。特筆すべきものとして掘方壁面より銅製の巡方が出土した。博多遺跡群内で出土すること自体は珍しいことではないが、調査区一帯においても官人等が居住していた施設が存在していたことが推測できる資料として注目される。井戸自体は9世紀代の時期が考えられる。

3区とした調査区からは遺物26箱分出土した。第186次調査全体としては、弥生土器をはじめとして、古式土師器、須恵器、土師器、縁輪陶器、瓦器、白磁・青磁等の貿易陶磁器、国産陶器、銅錢、獸骨、巡方等の銅製品などがコンテナケース54箱分が出土した。

以下に各遺構面で検出した井戸遺構・一定の主軸を採る遺構群・その他の遺構について説明を行う。

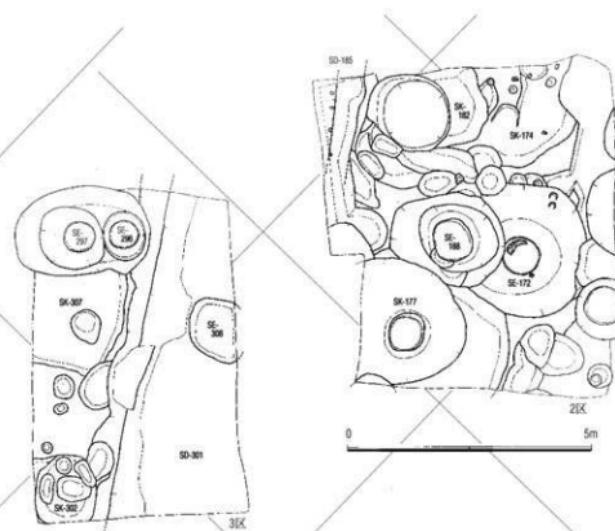
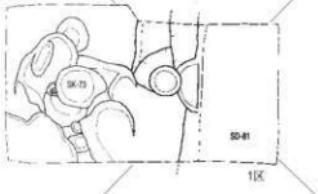


Fig. 10 第4面遺構実測図 (S=1/100)



Ph. 16 1区第4面遺構検出状況（北東から）



Ph. 17 2区第4面遭撲検出状況（南西から）



Ph. 18 3区第4面遺構検出状況（北東から）

2. 井戸

第186次調査においては計11基以上の井戸遺構を検出し、うち近世以降の瓦井戸を除く6基について調査を行った。また、調査区壁付近で検出された井戸遺構（主に瓦井戸）については安全対策上の理由から掘方の確認および一部の掘り下げを行ったのみで完掘は行っていない。なお、調査を行った各井戸遺構についても各検出面からの完掘は掘方崩壊の懼れがあったためこれを行わず、各遺構面の調査においては順次1m程度の掘り下げのみを行い、各区第4面の調査において井筒の検出並びに完掘を行った。

SE-172 (Fig-11)

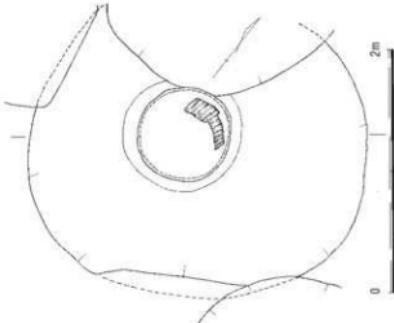
2区東側で検出した井戸遺構で、第2面で掘方の一部を確認した。第3面において掘方全体を検出できたため、一部を掘り下げて井筒の検出作業を行い、第4面で完掘した。井戸の掘方は北西側のSE-188の掘方に切られる。第3面で検出した掘方は不整円形で直径2.70mを測り、標高3.40m前後から掘りこまれる。検出面から掘方底面までは2mを測り、掘方底面の平坦面中央部に井筒を据える。井筒には直径70cm前後の結桶を2個体以上転用しており、上段に据えられていた結桶の一部が内部に落ち込んでいた。桶は最下段の高さ25~30cm分のみが全周して残存するが腐食のため遺存状態は不良であった。結桶の外側ではタガは観察できなかった。標高1.00m付近から湧水が確認された。

理土からは土師器坏・瓦器椀・白磁等の貿易陶磁が出土した。出土遺物をFig-12に示した。

1は白磁碗である。直線的に開く体部を持ち、端部を小振りな玉縁とする。疊付直上まで施釉する。焼成は良好で、釉調は乳灰白色を呈する。掘方壁面から出土した。2は瓦器椀である。高台部付近のみ出土したもので、高台は断面形が方形を呈する。外器面はナデ調整され、内器面にはヘラ磨きが施される。焼成は良好で色調は黒褐色を呈する。

3は白磁玉縁碗である。4は緑釉陶器碗である。

5は白磁碗である。6は土錘である。これらの出土遺物より11世紀末から12世紀初頭の時期が考えられる。



SE-177 (Fig-13)

2区西側で検出した井戸遺構で、第3面で検出した。検出時には中央部井筒の痕跡は確認できたが、掘方が他の遺構群によって不明確であったため第4面で、掘方の確認および完掘を行った。掘方の北半分については調査区壁面以下に続くため、安全確保のために掘削は行っていない。掘方は直径2.60m前後の不整円形と復元できる。井筒は直径70cm前後の結桶で転用されており、井戸掘方底面の平坦面中央部に据えられる。出土遺物をFig-12に示した。

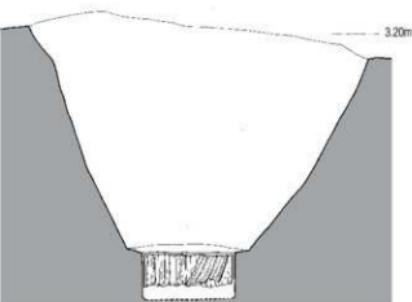


Fig. 11 SE-172 遺構実測図 (S=1/40)



Ph. 19 SE-172 完掘状況（北から）



Ph. 20 SE-172 井筒検出状況（北から）

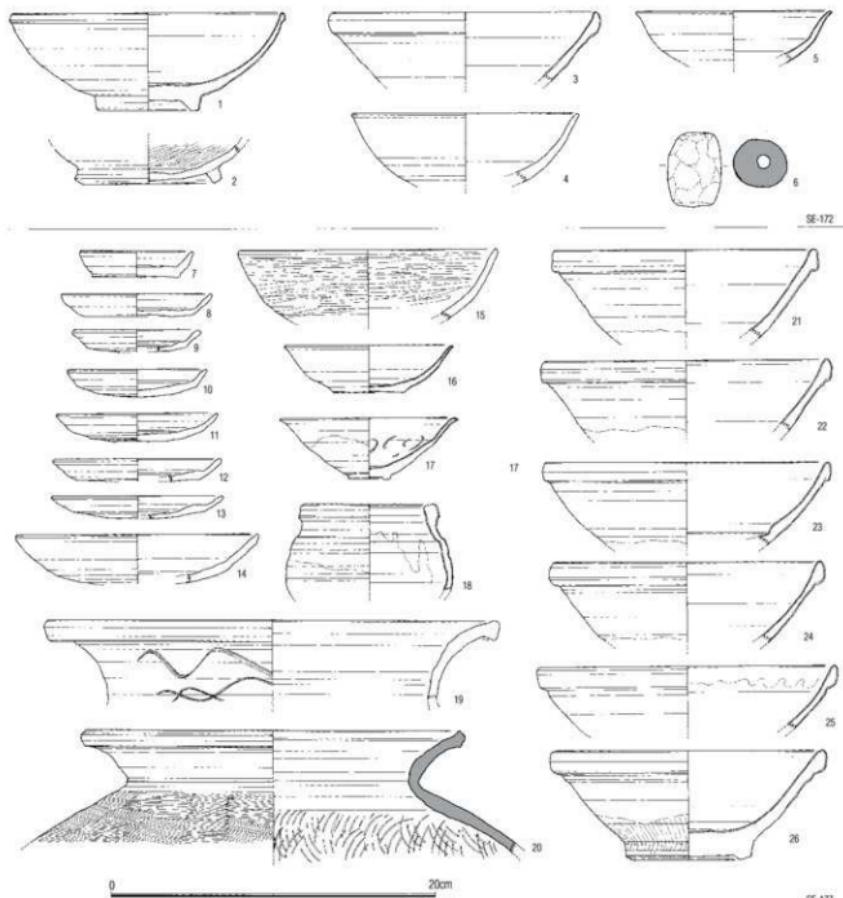


Fig. 12 出土遺物実測図 (S=1/3)

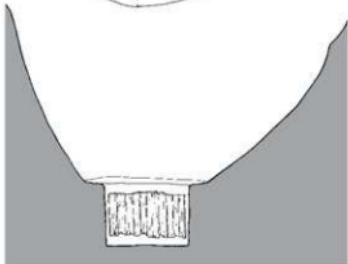
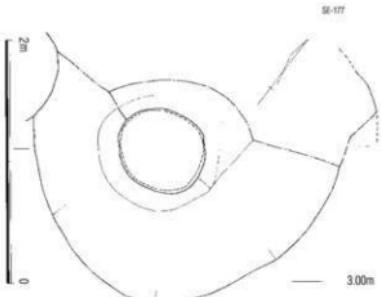


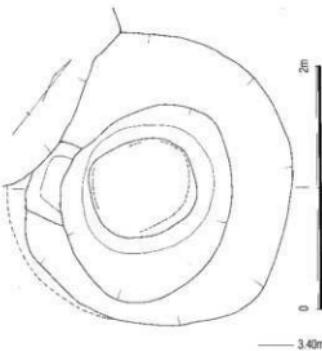
Fig. 13 SE-177 埋構実測図 (S=1/40)



Ph. 21 SE-177 完掘状況（東から）

7~13は土師器小皿である。7・8は糸切り底部で残りはヘラ切りである。14はヘラ切りの土師器壺である。15は瓦器椀である。16は白磁平底皿である。

17は連江魁岐窯青磁碗である。18は褐釉陶器小壺である。19は高麗陶器壺である。20は須恵器壺である。21~26は白磁碗である。これらの出土遺物より12世紀前半代の時期が考えられる。



SE-188 (Fig-14)

2区中央部で検出した井戸遺構で、SE-172を切るように掘削される。第3面で掘方を検出し、第4面で完掘した。掘方は直径は2.40m前後の不整円形で、掘方底面に狭小な平坦面を設けて直径80cm程度の桶を転用して井筒とする。桶は腐食のため痕跡がスタンプとなって確認できるにすぎない。掘り下げ途中に掘方西側壁にSK-187とした土坑を検出した。土坑内からはFig51-352で示した古墳時代初頭の土師器甕が出土した。



Ph. 22 SE-188 完掘状況（東から）

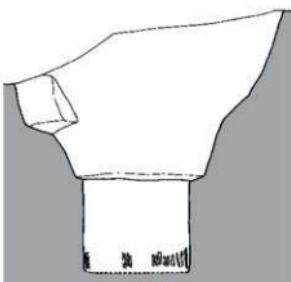


Fig. 14 SE-188 埋構実測図 (S=1/40)

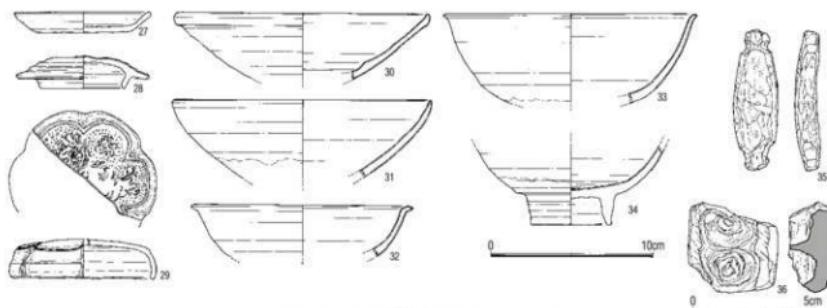


Fig. 15 出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

出土遺物をFig.15に示した。27はヘラ切りの土師器小皿である。28は青白磁蓋である。29は青白磁合子蓋である。30～34は白磁碗である。35は滑石製石鍤である。36は滑石製石製品である。これらの出土遺物より11世紀末頃の時期が考えられる。

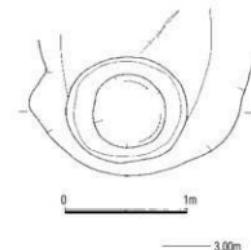


Fig. 16 SE-296 遺構実測図 (S=1/40)

SE-296 (Fig.16)

3区北側で検出した井戸遺構で、第3面で掘方の一部を検出した。掘方は長軸1.5m×短軸1.0mの楕円形で、SE-297を切るように掘削された。井筒には桶を使用しているが、腐食が激しく部分的に桶は直径60cmのものが使用される。底面は標高1.65m付近まで掘削されており涌水点が高かったことが分かる。

出土遺物をFig.19に示した。37・38は糸切りの土師器小皿である。39はヘラ切りの土師器小皿である。40は白磁碗である。41は土師器壇である。42は内黒の黒色土器壇である。43は白磁碗である。44は中国陶器壺である。45は須恵器壺である。これらの出土遺物より遺構の時期は11世紀代中頃から後半の年代が考えられる。

SE-297 (Fig.17)

3区北側で検出した井戸遺構で、SE-296に切られる。

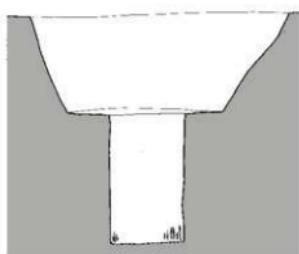
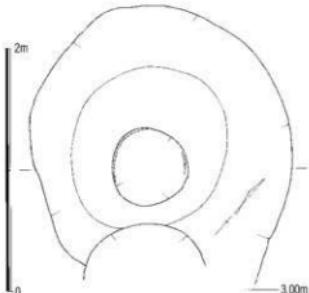


Fig. 17 SE-297 遺構実測図 (S=1/40)



Ph. 23 SE-296・297 検出状況（北東から）



Ph. 24 SE-296 井筒検出状況（南から）

SE-296と同様に第3面で掘方を検出し、第4面で完掘した。掘方の中央部に井筒を据える。井筒は桶を使用したものと考えられるが、遺存は不良で板材の一部が残るのみである。直径60cm程度の結桶が転用されたものと考えられる。

出土遺物をFig.19に示した。46・47はヘラ切りされた土師器小皿である。井筒最下面から出土した。48は土師器壺口縁部片である。49は土師器壺である。50は中国陶器小壺である。51は白磁碗である。52～54は須恵器蓋である。井戸埋土より出土したもので下層の遺構から掘り出されたものである。60は中国陶器壺である。出土遺物と切り合い関係より時期は12世紀代初頭が考えられる。

SE-308 (Fig.18)

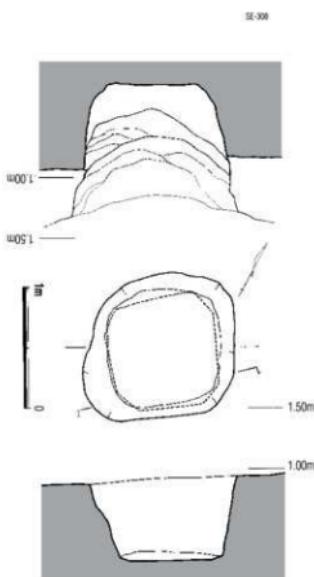


Fig. 18 SE-308 遺構実測図 (S=1/40)

3区南側で検出した井戸遺構で、SD-301掘り下げ中に検出した。3区南側土層観察より溝が30～50cm程度埋没した段階で掘削されている。検出時の掘方平面形は直径1.2m前後の多角形を呈しており、溝底面で確認した平面形は八角形を呈する。井筒は腐食のため残存しないが、土層断面より直径50cm前後の曲げ物を使用したものと考えられる。埋土より須恵器・白磁碗片などが出土し、掘方壁際より銅製巡方が出土した。

出土遺物をFig.19に示した。

55は須恵器蓋である。56は須恵器壺口縁部片である。色調は暗灰色を呈する。57は白磁蓋である。天井部に放射状に片切彫りの条線が施される。58はヘラ切りの土師器壺で、59は糸切り調整された土師器壺である。

61は銅製巡方の裏蓋である。長辺3.5cm×短辺3.2cmの長方形を呈し、各辺端部は斜めに整形され巡方本体ときちんととかみ合うように細工される。四隅には固定用の鋤孔が配置されており、うち一ヵ所には折れた鉗が残る。

これらの出土遺物よりこの井戸遺構の年代は9世紀初頭の時期が考えられる。



Ph. 25 SE-308 棟出状況（西から）



Ph. 26 SE-308 土層断面（北西から）

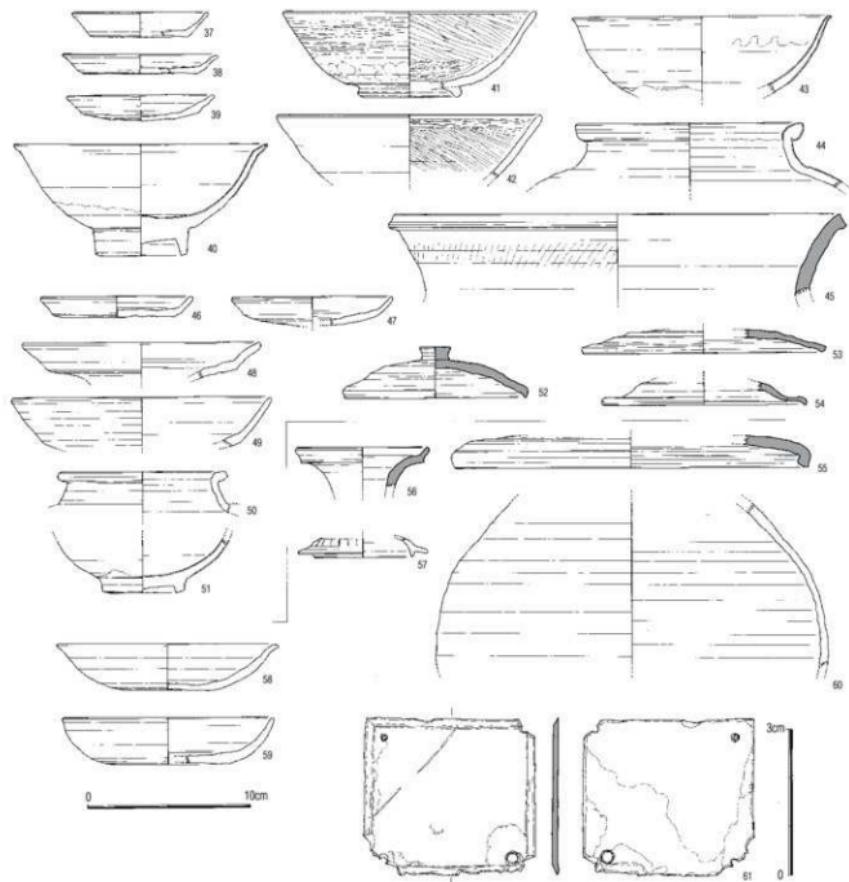


Fig. 19 出土遺物実測図 (S=1/1 · 1/3)

3. 区画遺構（土坑・溝・掘立柱建物・柱穴列）

各区各遺構面で検出した遺構の中には、各時代の町割・それに伴う区画の方向を示すものがある。

第1面では現在の町割りとほぼ同方向の主軸を探る遺構群が検出された。これらの遺構は太閤町割以後に整備された区画に則って構築されたものである。これらの遺構に切られる形で検出される遺構群は太閤町割直前まで存続していたものであり、これらの遺構群の主軸方向は太閤町割以後のものと全く連続性を持たないことが周辺で実施された調査成果からも分かる。本調査で確認された区画を示す遺構としては溝・柱穴列・土坑等があるが、概ね太閤町割以後の遺構群についてはN-38°-Wまたはこれに直交する主軸方向を探ることが分かる。太閤町割以前の区画を示す遺構群の主軸はN-67°-Eを探るもののがほとんどであり、若干の振れはあるものの長期間存続する町割・区画が存在していたことが窺える。各時期の町割りの変遷を復元する上で重要なと思われる遺構についての説明を行う。

SD-10・16・30 (Fig.21)

1区第1面南側で検出した溝遺構である。SD-10は上面で幅1.30mを測り、調査区内で3.50m分を確認した。溝の断面形は蒲鉾形で東側に向かって浅くなる。溝の主軸はN-67°-Eの方向を探る。SD-10直下にはほぼ同一の主軸方向を探るSD-30が検出された。SD-30は幅70cm、検出面から底面までの深さは20cm前後をはかる。SD-16はSD-30と同様に第1面以下への掘り下げ時に検出した溝遺構で、SD-13と一緒に並存した溝遺構と考えられる。両溝間の幅は1.60m前後で、部分的に黄褐色砂質土を主体とした硬化面が検出された。いずれの溝も調査区西側で立ち上がり3区へ延伸しないが、東側方向へは溝遺構自体深く傾斜しており延伸する可能性が強く考えられる。

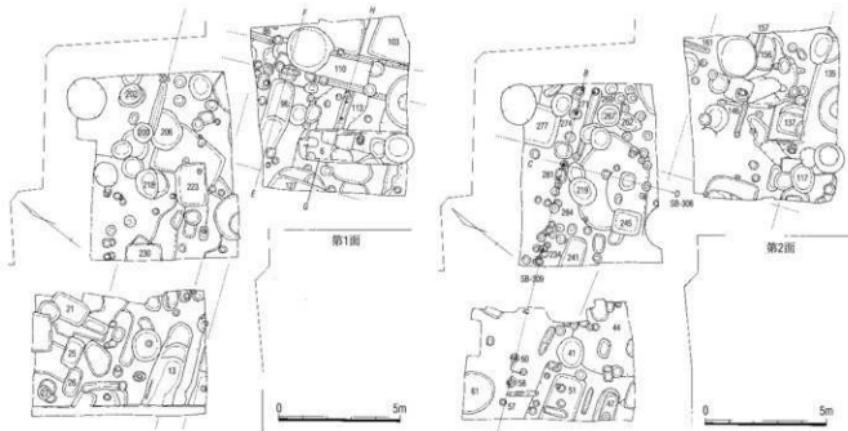


Fig. 20 区画遺構実測図 (S=1/200)

出土遺物をFig.23・25に示した。62～66はSD-10からの出土遺物で、62・63は糸切り調整された土師器小皿である。64はハラ切りの土師器小皿である。65は白磁玉縁碗である。66は土師質土器捕鉢である。71は瓦質土器である。72は平瓦で、器壁に「上」の字が線刻される。Fig.25-73はSD-16の出土遺物で土師器壺である。底部は糸切り調整される。

67～70はSD-30の出土遺物で、67～69はいずれも糸切り調整された土師器小皿である。70は直線的に開く体部を持つ土師器壺で底部は糸切りされる。14世紀前半代の時期が考えられる。

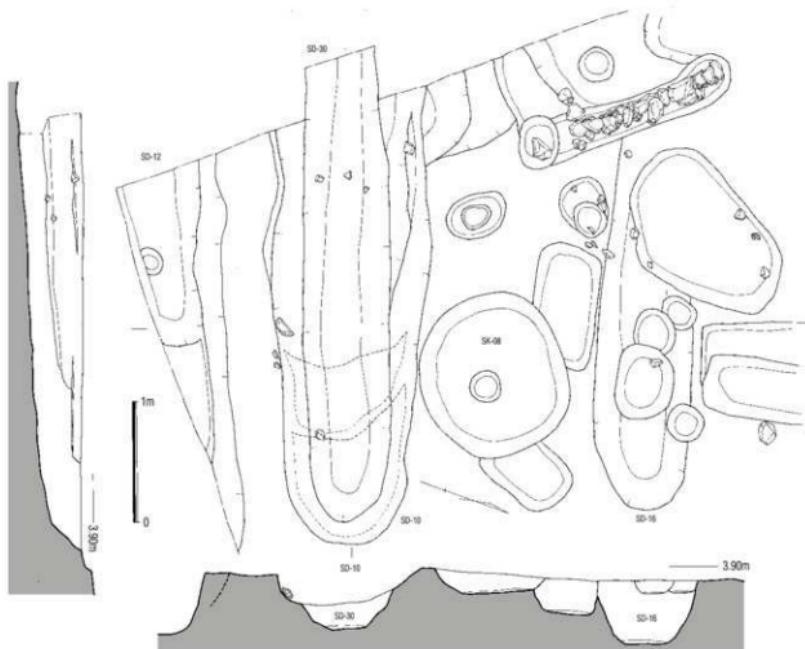


Fig. 21 遺構実測図 (S=1/40)



Ph. 27 SD-10・13 棲出状況（西から）



Ph. 28 SK-51 挖り下げ状況（北から）

SK-47・51 (Fig.22・Ph.28)

1区第2面東側において検出した遺構で、上面で検出したSD-10・30と近い主軸方向(N-74°-E)を探る方形土坑である。SK-51は掘方外郭線に沿って白色粘土が確認でき、土坑内壁面が粘土を薄く塗り広げて整形されていたことが窺える。幅1.20m、検出面から底面まで深さ28cm程度を測る。土坑内からは螺・白磁・土師器などの遺物が出土する。

半地下式の倉庫または建物地業に伴うものと考えられる。

SK-47は幅90cmを測り、調査区内では1.50m分を検出した。

断面形は箱形で深さは65cm程度を測る。SK-51より主軸は西寄りでN-68°-Eの方向を探る。

SK-47からの出土遺物をFig.25に示した。83・84は土師器壺である。いずれも底部は糸切り調整される。85・86は青磁碗である。いずれも疊付まで施釉される。

SK-14 (Fig.24)

1区第1面で検出した石組遺構で、遺構の主軸方向は現在の町割りと同一方向(N-38°-W)を探る。太閤町割以後に構築された半地下式の遺構である。石組は現状で三段分が残り、使用される石材

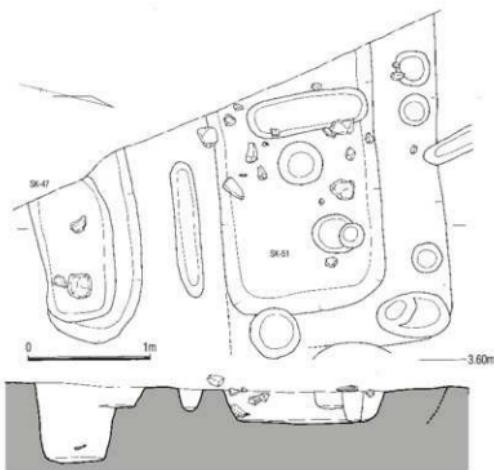


Fig. 22 遺構実測図 (S=1/40)

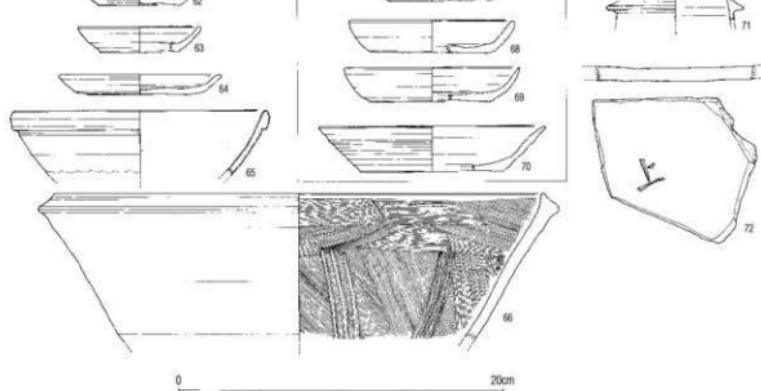


Fig. 23 出土遺物実測図 (S=1/3)

は10~20cm大の自然礫であり、下段では内面に向けて平坦面を描える。

出土遺物をFig.25に示した。89は糸切りの土師器坏である。90は土師質土器鉢である。胎土は緻密で赤褐色の化粧土で装飾される。

SK-21・25 (Fig.24)

1区第1面北側で検出した長方形土坑で、N-12°-W、N-77°-Eとはば直交する主軸方向を探る。長軸は1.55m、L20m、短軸1.0m、0.7mを測り、検出面から底面までの深さは28cm、42cmを測る。両遺構ともに白色粘土をブロック状に含む暗褐色粘質土の埋土で、底面はほぼ平坦となる。

出土遺物をFig.25に示した。74~76はSK-21の出土遺物で、77~79がSK-25の出土遺物である。74・75は土師器坏である。74は直線的に聞く体部を持ち全体的に薄手の造りである。色調は赤褐色を呈し焼成は良好である。いずれも糸切りされる。76は15世紀代の龍泉窯系青磁碗で混入した遺物であろう。77は白磁碗である。78は土鍤である。79はヘラ切りの土師器坏である。復元径12.0cmを測り胎土は緻密。色調は淡褐色を呈する。下層の遺構からの混入であろう。

SK-27 (Fig.24)

1区第1面北側で検出した円形土坑である。直径50cm程度の円形土坑で、検出面から底面まで15cmの深さを測る。土坑上面中央部付近から土師器坏が出土した。

Fig.25に出土遺物を示した。

80は土師器坏である。底部は糸切り調整され、体部中程から直線的に聞く口縁を持つ。焼成は良好で色調は橙色を呈する。

SK-44 (Fig.8)

1区第2面で検出した土坑である。

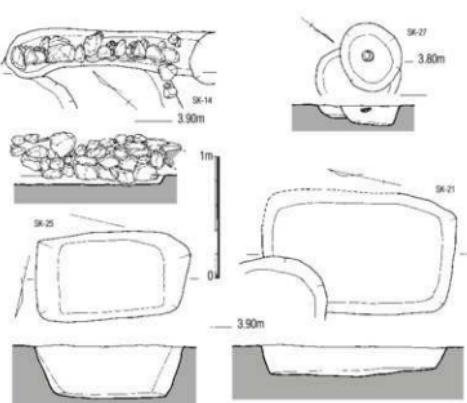


Fig. 24 遺構実測図 (S=1/40)



Ph. 29 SK-14 検出状況（西から）



Ph. 30 SK-14 検出状況（南西から）



Ph. 31 SK-27 遺物出土状況（南東から）



Ph. 32 1区第1面遺構検出状況（北東から）

平面形は判然としないが、隅丸方形の土坑と考えられる。北側の一辺のみが明瞭に検出でき、この部分での主軸方向はN-74°-Eの方向を探る。

出土遺物をFig.25に示した。81は白磁玉縁碗である。82は白磁鉢である。口縁は釉を拭き取り口禿とする。釉調は乳灰褐色を呈する。これらの出土遺物より遺構の時期は14世紀前半代と考えられる。

SK-61 (Fig.8)

1区第2面北西部で検出した円形土坑である。掘削当初は井戸遺構の掘方である可能性も考えられたが、20cm程度掘り下げて完掘した。埋土は暗褐色砂質土で土坑壁面には褐色砂が堆積する。

埋土より土師器小皿・白磁・中國陶器等がわずかに出土した。

出土遺物をFig.25に示した。

87・88は土師器小皿である。復元口径は9~10cmを測り、ともに糸切り調整された底部を持つ。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。

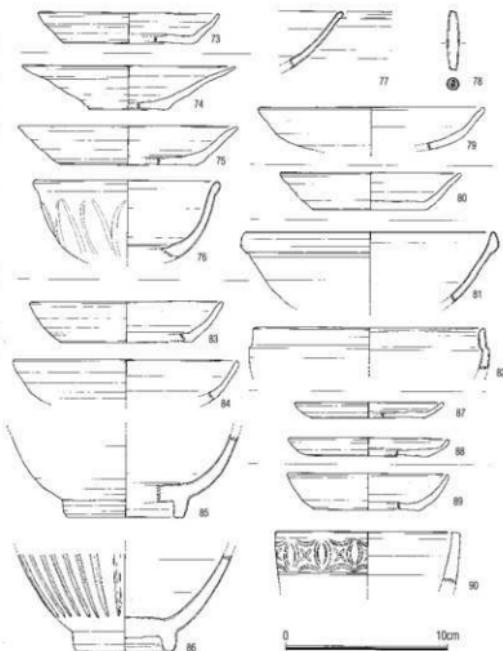


Fig. 25 出土遺物実測図 (S=1/3)

SB-309 (SP-57・60・237・281・275・271) (Fig.20・26)

1・3区で検出した柱穴列で直線上に柱穴が検出される。柱穴の中には板状の板石が据えられたものがある。これらの柱穴列はN-67°-Eの主軸方向を探り、上面で検出された溝遺構など同一主軸で構築されたものである。これに直交する主軸で柱穴列が検出されるが建物としてまとめきれないため、遺構の性格は判然としない。これらの柱穴列と平行してSD-269とした溝遺構も検出されている。各柱穴の間隔は50cm程度で、各柱穴は深さ20~30cmを測る。

出土遺物をFig.31に示した。131はSP-271から出土した白磁碗である。133はSP-281から出土した中國陶器蓋である。134はSP-281から出土した白磁碗である。

SB-310 (SP-234・249・257・280・284) (Fig.20・26)

SB-309に直交する柱穴列であり、3区のみで検出される。また、2区第1面ではこれら柱穴列に平行する形でSD-104・109とした溝遺構も検出されており、比較的近接した長屋的な建物の存在が想定される。

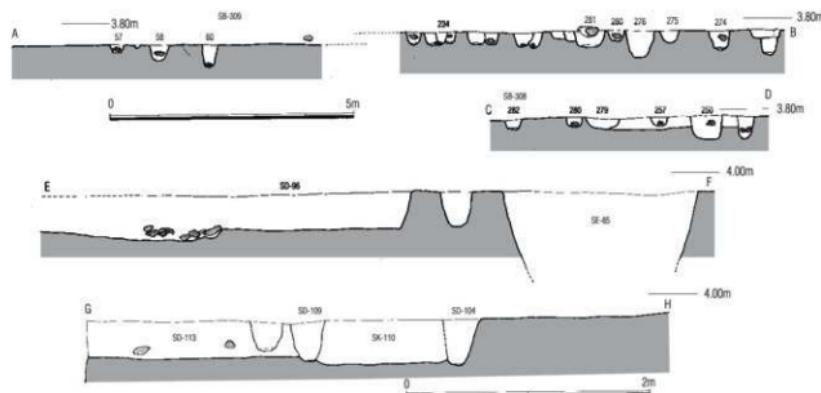


Fig. 26 遺構実測図 (S=1/40・1/100)



Ph. 33 3区柱穴列検出状況（西から）



Ph. 34 2区第1面区画遺構検出状況（南から）

SD-96 (Fig.7・20)

2区第1面で検出した溝遺構で、1区で検出したSD-10・13の延長線上にありほぼ同一主軸を採る。一連の区画溝の可能性が考えられる。溝の幅は1mで検出面から底面までの深さは25~30cmを測り、東側方向に向かって一段深くなる。溝底面の段付近からは被熱により赤変化した礫が集中して出土する。出土遺物をFig.28に示した。91~93は糸切りの土師器壺である。94・95は白磁碗である。119は中国陶器捏鉢である。120・121は中国陶器壺口縁部片である。

SD-86・104・109・113 (Fig.20・26)

2区第1面で検出した溝遺構で、SD-104・109は幅1mの間隔で平行する。溝の主軸はN-25°-Wの方向を探り、柱穴列と直交する主軸となる。溝間は黒褐色粘質土を埋土とする方形土坑(SK-110)となる。SD-113は前述の溝遺構に直交するもので幅35cm、深さ30cmを測る。

出土遺物をFig.28に示した。97・98は土師器壺である。99は白磁小碗である。100は須恵器碗である。105・106は糸切りの土師器小皿である。107・108は土師器壺である。109は同安窯系青磁碗である。101はSD-109から出土した布目瓦である。焼成は良好で色調は褐色を呈する。

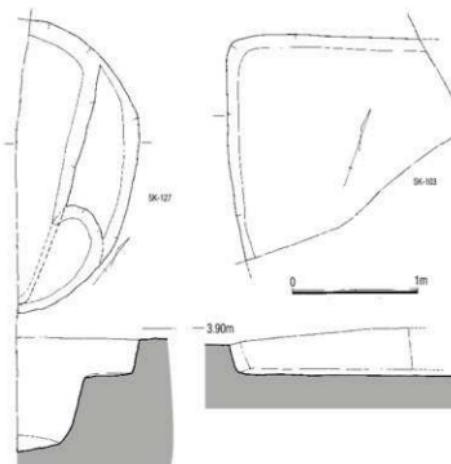


Fig. 27 遺構配置模式図 (S=1/400)

SD-205 (Fig.20)

3区第1面で検出した溝遺構で、前述のSD-113と平行する溝遺構である。幅30cm、検出面から底面までの深さは25cm程度を測る。

SD-146・157・161 (Fig.8・20・26)

2区第2面で検出した溝遺構であり、主軸方向はN-68°-E方向を探る。3区第2面で検出されたSD-269とも一連の区画を示す遺構である。

SK-103・127 (Fig.27)

2区第1面で検出した方形土坑であり、溝遺構に画された屋敷地内の付随遺構と考えられる。



Ph. 35 SK-127 堀り下げ状況 (北から)



Ph. 36 2区第1面区画遺構検出状況 (北東から)

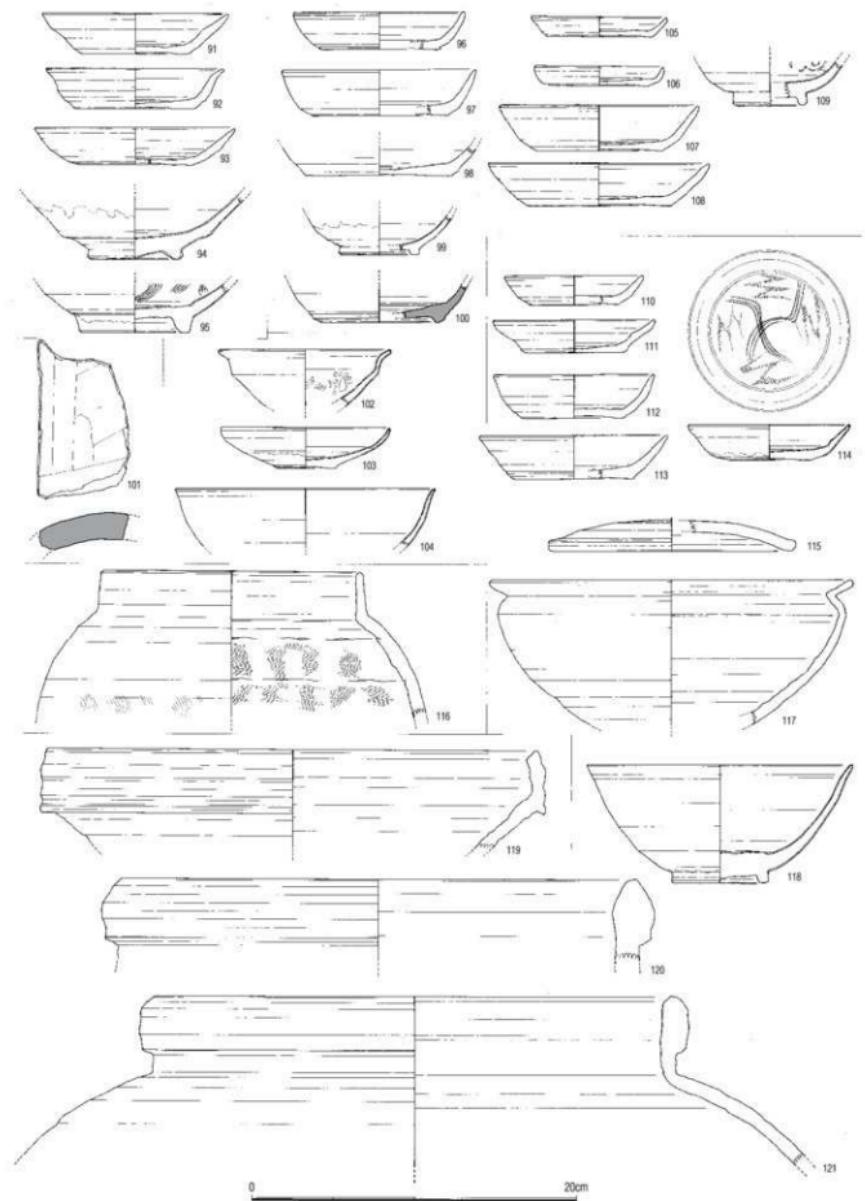


Fig. 28 遺出土遺物実測図 (S=1/3)

SK-103は北西隅部を検出した方形土坑で、検出面から底面までの深さは25cm前後をはかる。SK-127は東側の一部のみが調査区にかかるのみで全容は不明確であるが、検出された東辺は他の区画を示す遺構群とほぼ同一の主軸方向を探る。

出土遺物をFig.28に示した。96は糸切りの土師器坏である。116は土師質土器である。

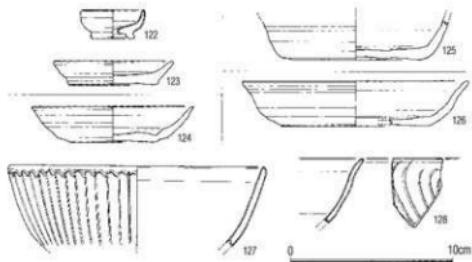


Fig. 29 出土遺物実測図 (S=1/3)

SK-245・277 (Fig.30)

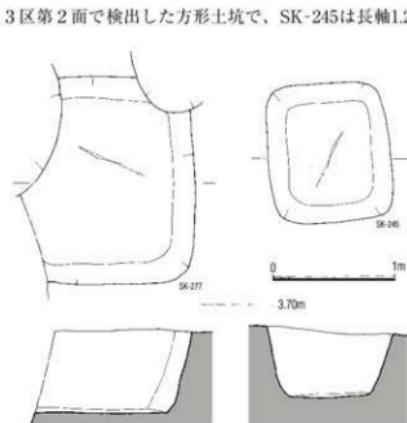


Fig. 30 遺構実測図 (S=1/40)

SK-121 (Fig.8)

2区第1面南端部で検出された遺構で、大半が調査区外に伸びるため全容は判然としない。他の遺構と同様にN-67°-E方向の主軸を探る。

出土遺物をFig.28に示した。

110～113は土師器坏である。いずれも糸切り調整された底部を持つ。114は同安窯系青磁平底皿である。115は中国陶器蓋である。117是中国陶器鉢である。

55cmの深さを測り、埋土は上面に炭化物層が堆積する。SK-277は北側部分がSE-203とした近世瓦井戸によって失われるが、一辺1.70mを測る方形土坑である。検出面から底面までは70cm程度の深さを測るが、底面は博多遺跡群の基盤層である砂丘砂層面に達している。第3区調査の掘削状況より調査区が砂丘頂部から北側斜面上に位置していることが推測できる。遺構の主軸はN-28°-Wまたはこれに直交する方向を探るもので、この他にはSK-241などの遺構も同一主軸を探る。

出土遺物をFig.31に示した。

129・130はSK-245の出土遺物で白磁平底皿・龍泉窯系青磁碗である。

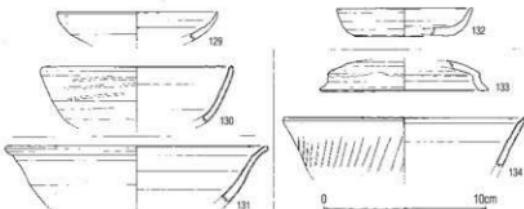


Fig. 31 出土遺物実測図 (S=1/3)



Ph. 37 SK-245 土層断面（北東から）



Ph. 38 3区 SD-301 検出状況（北東から）

大溝（区画溝）

SD-81・82・185・301 (Fig.32)

1～3区で断片的に検出した溝遺構で、調査区を東北方向から南西方向に貫く形で検出される。検出された部分での遺構主軸はN-63～65°-Eの方向を探る。溝の全容については多くが未調査部分に含まれるため判然としない部分が多いが、検出された範囲では上面の幅が3.50m前後を測り、溝上面から底面までの深さは1.20m以上を測ることが分かる。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦に整形されており、底面直上には黒色粘質土と砂層が交互に堆積する。底面の砂丘砂層には上面から侵食した鉄分沈着層が形成されており、溝の供用開始時点は帶水環境であったことが分かる。土層断面の観察より北側（博多湾側）からの風成砂層により徐々に埋没していたことが窺える。

出土遺物をFig.33に示した。

135・136は糸切りの土師器壺である。137はヘラ切りの土師器壺である。138は瓦器枕である。内器面には並行するヘラ磨きを密に施す。139は中国陶器壺口縁部片である。140は青白磁の合子身である。口唇部の釉を拭き取り口禿とする。141は中国陶器四耳壺である。142は中国陶器壺胴部片である。143は須恵器壺である。144・145は須恵器碗である。146は内黒の黒色土器碗である。

147は白磁碗である。148は同安窯系青磁平底皿である。149は越州窯系青磁碗である。

150は土師質土器鍋である。外器面には煤が付着する。151は中国陶器磁竈蓋の黄釉鐵絵盤である。152・153は中国陶器四耳壺である。154は白磁壺の底部片である。155は中国陶器壺である。外器面に条線を一条施す。内器面は頸部下まで施釉し、以下を露胎とする。

これらの出土遺物と他の遺構との切り合い関係より、この大溝の存続年代は8世紀代から12世紀後半代の年代が考えられる。溝が廃絶された後もこの一体の主要区画主軸として影響を及ぼしていたことが1・2面の遺構から推測される。

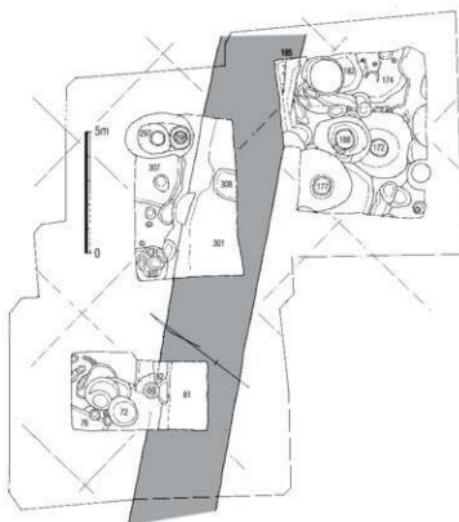


Fig. 32 区画遺構実測図 (S=1/200)

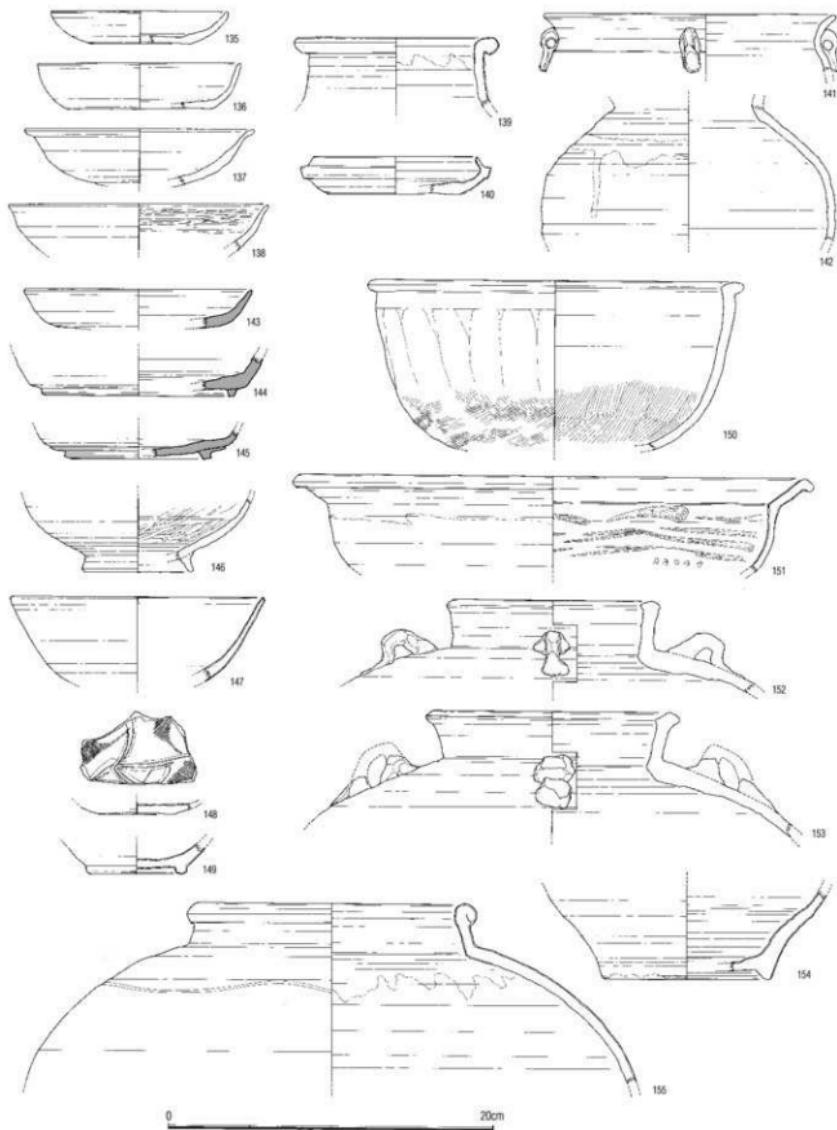


Fig. 33 出土遺物実測図 (S=1/3)

その他の遺構

これまでではほぼ同一主軸を探る遺構群についての説明を行ってきたが、以下では異なる主軸を持つ遺構と特に重要と思われるものについて報告を行う。

SK-64 (Fig.34)

1区第3面で検出した楕円形土坑で、西半分が調査区外に位置するため全容は不明確である。この遺構は大溝（SD-81）埋没途中に掘削されたことが土層観察から分かる。出土遺物をFig.37に示した。156・157は糸切りの土師器壺である。158は白磁碗である。159は瓦器椀である。出土遺物より12世紀中頃の時期と考えられる。



Ph. 39 1区 SD-81 検出状況（北東から）



Ph. 40 1区第3面遺構検出状況（北から）

SK-65 (Fig.34)

1区第3面で検出した方形土坑で、西側をSK-64に切られる。出土遺物をFig.37に示した。160は糸切りの土師器小皿である。161はヘラ切りの土師器壺である。162は瓦器椀である。163は白磁平底皿である。164は越州窯系青磁碗である。165は越州窯系青磁鉢である。

SK-67 (Fig.34)

1区第3面東端部で検出した円形土坑で、検出面から底面までの深さは55cm前後を測る。

出土遺物をFig.37に示した。166は瓦器椀である。168は糸切りの土師器小皿である。169は土師器甕口縁部である。他の遺構からの混入であろう。170は中国陶器大甕の口縁部である。

SK-69 (Fig.34)

1区第3面で検出した円形土坑で、廃棄土坑である。

出土遺物をFig.37に示した。

171はヘラ切りの土師器小皿である。172はヘラ切りの土師器壺である。173・174は瓦器椀である。

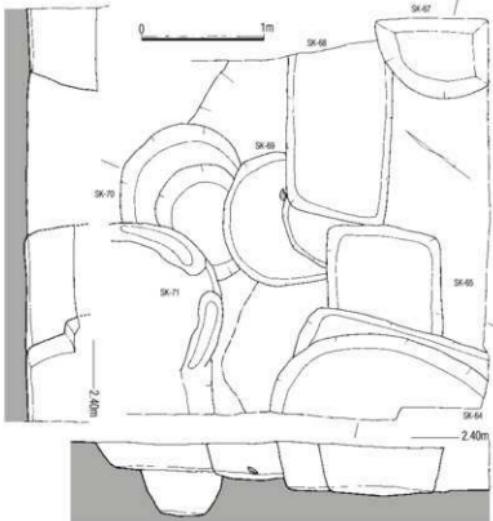


Fig. 34 遺構実測図 (S=1/40)

175は白磁碗である。176は白磁玉縁碗である。177は中国陶器壺である。出土遺物から遺構の時期としては12世紀初頭と考えられる。

SK-70 (Fig.34)

1区第3面で検出した楕円形土坑で、南側をSK-69に切られる。検出面から25cm前後の深さで平坦面を作り、さらに一段掘り下げる。内部の土坑も楕円形を呈し長軸90cm前後、深さは40cm程度を測る。底面は砂丘砂層面以下まで及んでいる。廃棄土坑と考えられる。

出土遺物をFig.37に示した。177は白磁玉縁碗である。胎土は灰白色で精緻、釉調は乳灰白色となる。

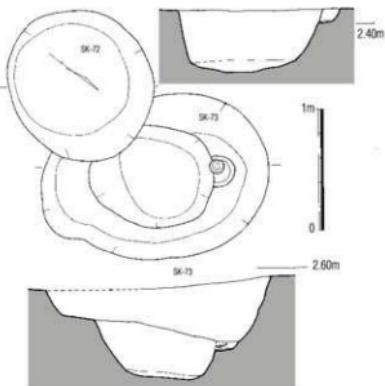


Fig. 35 遺構実測図 (S=1/40)

SK-72 (Fig.35)

1区第3面で検出した円形土坑で、直径1.20m前後を測る。検出面から底面までは50cm前後の深さを測り、底面は中央部がやや窪むがほぼ平坦面となる。出土遺物をFig.37に示した。178は糸切りの土師器壺である。179は同安窯系青磁碗である。

SK-73 (Fig.35)

1区第3面で検出した土坑で、SK-72に切られる。底面直上に土師器壺が据えられる。出土遺物をFig.37に示した。180は糸切り調整された土師器壺である。181は白磁玉縁碗である。

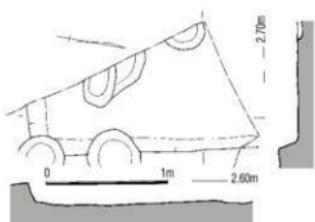


Fig. 36 遺構実測図 (S=1/40)

SK-76 (Fig.36)

1区第3面西端部で検出した方形土坑で、大半は調査区外に伸びるため全容は把握できていない。遺構の掘り込み面は砂丘砂層面で、埋土は暗褐色砂となる。検出された東辺から遺構の主軸がN-14°-Wの方向を探ることが分かる。方形堅穴住居の可能性が考えられる。出土遺物をFig.37に示した。182は内黒の黒色土器塊である。183は土師器高環脚部片である。184は土師器甕である。



Ph. 41 1区第3面遺構検出状況（東から）



Ph. 42 SK-73 遺物出土状況（南西から）

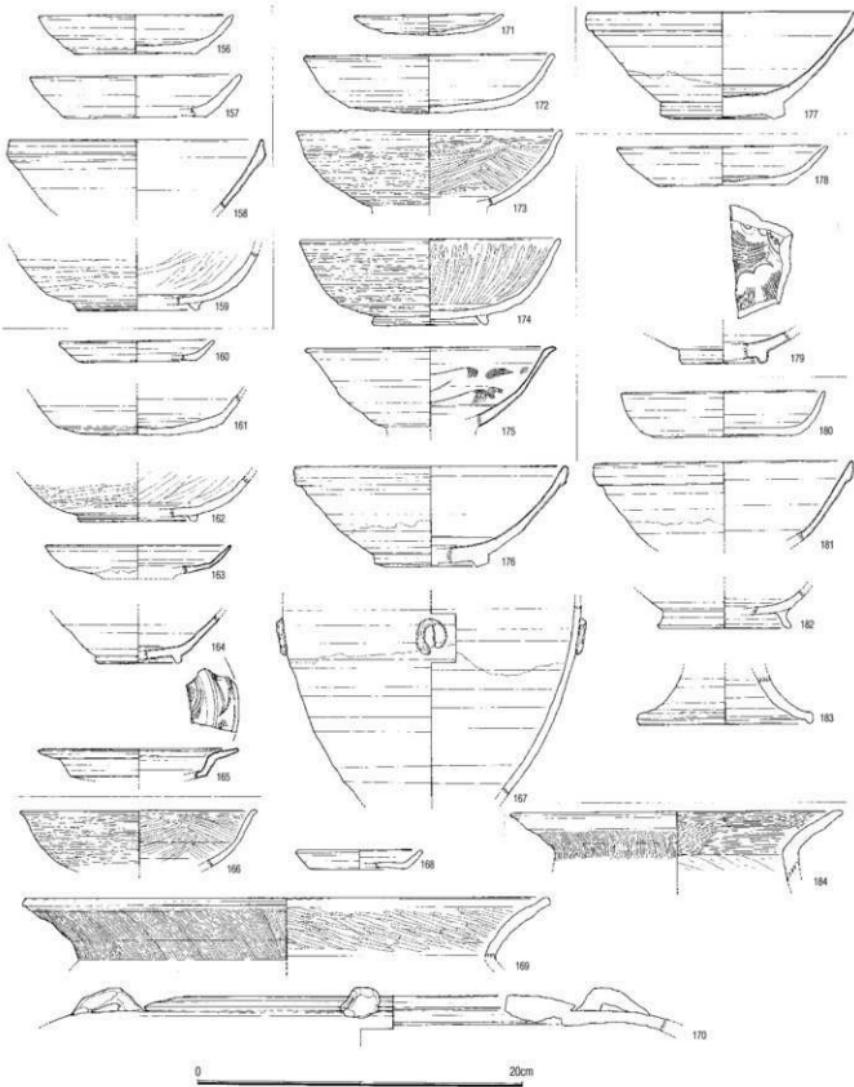


Fig. 37 出土遺物実測図 (S=1/3)

SK-215 (Fig.38)

3区第1面で検出した土坑で、埋土は暗褐色粘質土である。遺構壁面には白色粘土が薄く確認された。建物に伴う半地下式の土倉下半部か。

出土遺物をFig.39に示した。
185は糸切りの土師器環である。
186は高麗青磁碗である。
187は邵武窯白磁八角碗である。
高台内に朱墨で墨書きされる。
192は土師質土器の捏鉢である。

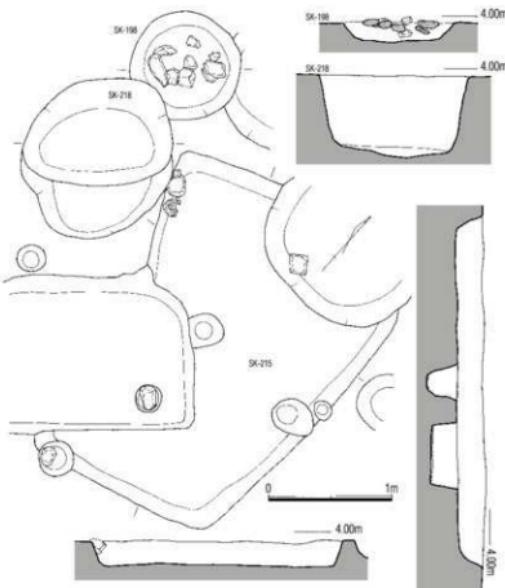


Fig. 38 遺構実測図 (S=1/40)

SK-218 (Fig.38)

3区第1面で検出した楕円形土坑で、焼土・炭化物が厚く堆積する。出土遺物をFig.39に示した。188は糸切りの土師器小皿である。189は漳州窯明青花皿である。

SK-259 (Fig.9)

3区第2面で検出した柱穴である。出土遺物をFig.39に示した。190は須恵器越胴部片である。下層の遺構から混入したものか。焼成は良好で、胎土は精緻。色調は暗灰褐色を呈する。

SK-264 (Fig.9)

3区第2面で検出した楕円形土坑である。出土遺物をFig.39に示した。191は白磁平底皿である。

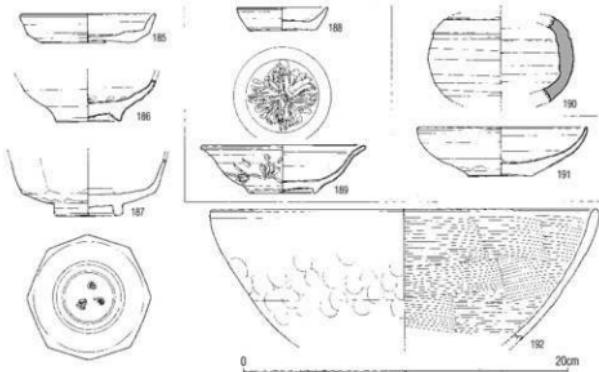


Fig. 39 出土遺物実測図 (1/3)

SK-115 (Fig.40)

2区第1面で検出した楕円形土坑で、土坑内に瓦・礫が充填される。出土遺物をFig.41に示した。193は糸切りの土師器小皿である。197は瓦器碗である。198は白磁碗である。199は中国陶器である。

SK-117 (Fig.40)

2区第1面で検出した楕円形土坑で、SK-115に切られる。上層には黒褐色粘質土と炭化物が堆積しており、埋土中から瓦・礫が集中して検出される。礫は被熱のため一部赤変化するものがある。中層以下は暗褐色砂質土となる。長軸1.2m×短軸0.9mを測り、検出面から底面までは65cm前後をはかる。埋土中より土師器・白磁の小破片が出土した。

SK-123・124 (Fig.7)

2区第1面で検出した土坑で、SK-123は深さ5cm程度である。SK-124は直径40cm程度の土坑で深さは40cm程度を測る。埋土より土師器等の小破片が出土している。出土遺物をFig.41に示した。

194は糸切りの小皿である。195はSK-124出土のヘラ切りの小皿である。196は白磁玉縁碗である。

SK-140 (Fig.40)

2区第2面で検出した土坑で、南側をSK-117

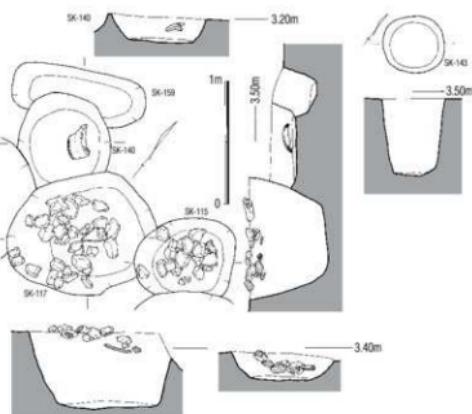


Fig. 40 遺構実測図 (S=1/40)

193, 194, 195, 196, 197, 198, 199

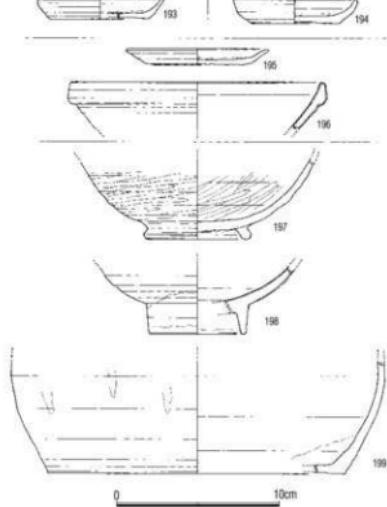


Fig. 41 出土遺物実測図 (S=1/3)



Ph. 43 SK-117 掘り下げ状況（南から）



Ph. 44 SK-140 遺物出土状況（北から）

に切られる。平面形は円形で直径70cm、検出面から底面までは20cm程度を測る。埋土は黒褐色粘質土を主体とし、埋土中より瓦質土器・土師器などが出土する。出土遺物をFig.42に示した。203は糸切りの土師器小皿である。204は揭軸陶器である。211は瓦質土器火鉢である。

SK-143 (Fig.40)

2区第2面北側で検出した円形土坑で、直径40cm深さ65cmを測る。上層は暗褐色粘質土で中層以下には暗褐色砂質土が堆積する。埋土中より土師器・白磁・青磁などが出土した。出土遺物をFig.42に

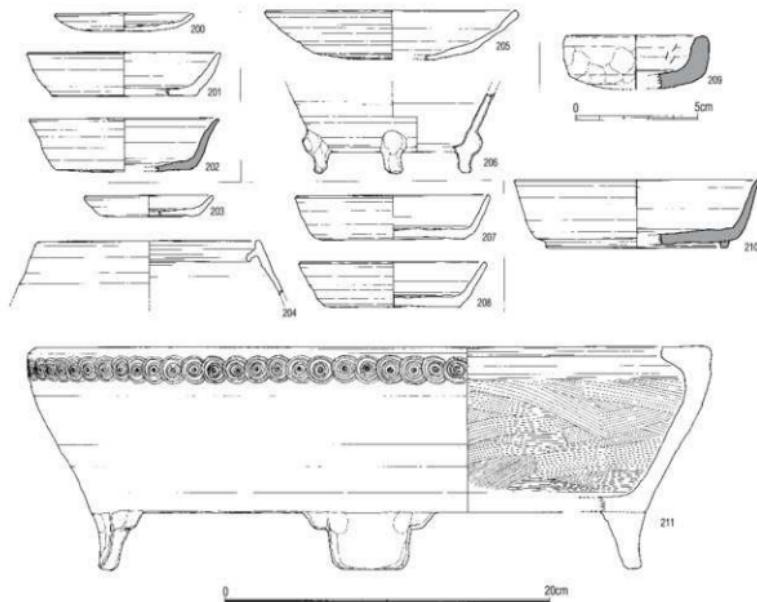


Fig. 42 出土遺物実測図 (S=1/2 · 1/3)



Ph. 45 SK-115 堀り下げ状況（北から）



Ph. 46 SK-137 遺物出土状況（南東から）

示した。205はヘラ切りの土師器坏である。206は龍泉窯系青磁の香炉脚部である。

SK-137 (Fig.43)

2区2面の南側で検出した土師器廃棄上坑である。土坑平面形は方形で南側は他の区画造構に切られる。現状で長軸1.10m×短軸0.9mを測り、深さは25cm前後をはかる。埋土は炭化物を多く含む黒褐色粘質土が堆積しており、上層付近に土師器坏・小皿が集中して廃棄される。

出土遺物をFig.44に示した。212～217は土師器小皿である。いずれも底部は糸切り調整される。218～237は土師器坏である。底部は全て糸切り調整され、板目圧痕が見られるものもある。237は口径16.0cmを測り、他の坏よりも一回り大きい。238は白磁玉縁碗である。239はSK-149から出土した土師器坏である。底部は糸切り調整される。

SK-136 (Fig.8)

2区第2面で検出した不定形の土坑である。南側は明瞭に判別できたが、造構北側に近世井戸

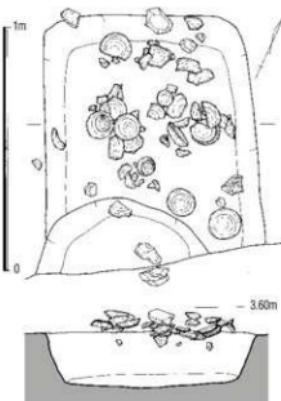


Fig. 43 造構実測図 (S=1/20)

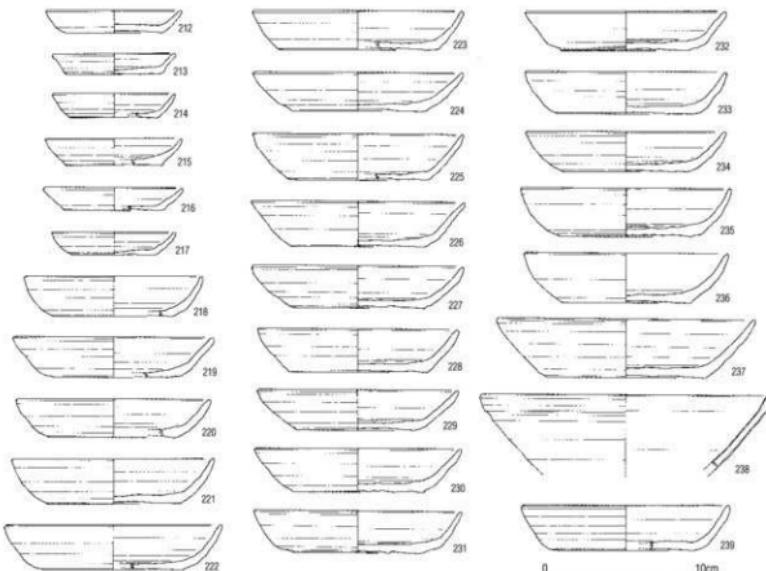


Fig. 44 出土遺物実測図 (S=1/3)

(SE-85) 等の複数の遺構が切り込むため全容は不明確である。検出された範囲から直径2m前後の浅い円形土坑と考えられる。検出面から底面までは15cm程度の深さを測り、埋土中より土師器・白磁小破片などが出土した。Fig.42に出土遺物を示した。200はヘラ切りの土師器小皿である。201は糸切りの土師器環である。202は須恵器环である。

SK-147 (Fig.8)

2区第2面中央部で検出した不定形土坑である。埋土は暗黄褐色砂質土で、検出面から底面までの深さは30cm程度を測る。遺構底面上から土師器環が出土した。Fig.42に出土遺物を示した。207・208は糸切りの土師器環である。209は滑石製の容器である。

SK-153 (Fig.8)

2区第2面東端部で検出した楕円形土坑で、長軸0.4mを測る。検出面から底面までは30cm程度の深さを測る。遺構埋土は暗褐色砂で、埋土中から須恵器碗が出土した。Fig.42に出土遺物を示した。210は須恵器碗である。高台の断面形は方形で色調は黒灰色を呈する。

SK-174 (Fig.45)

2区第3面で検出し、第4面で掘り下げた遺構である。平面形は北側を他の遺構群によって搅乱されるため判然としない。埋土は暗褐色砂で基盤層である砂丘砂層面中に掘削される。遺構底面はほぼ平坦となり、底面から20cm程度浮いた状態で土師器高坏・支脚などの遺物が検出された。この遺構上面にはSK-155・SK-156とした同様の不定形土坑が存在しており、両遺構は一連の遺構であり、弥生時代終末期から古墳時代初頭の住居である可能性が考えられる。

Fig.47に出土遺物を示した。268は須恵器碗である。269は土師器高坏である。270は土師器支脚である。272は西部瀬戸内系の古式土師器壺口縁部である。273は土師器壺である。274は弥生土器広口壺口縁部である。275は弥生土器壺頭部である。276は

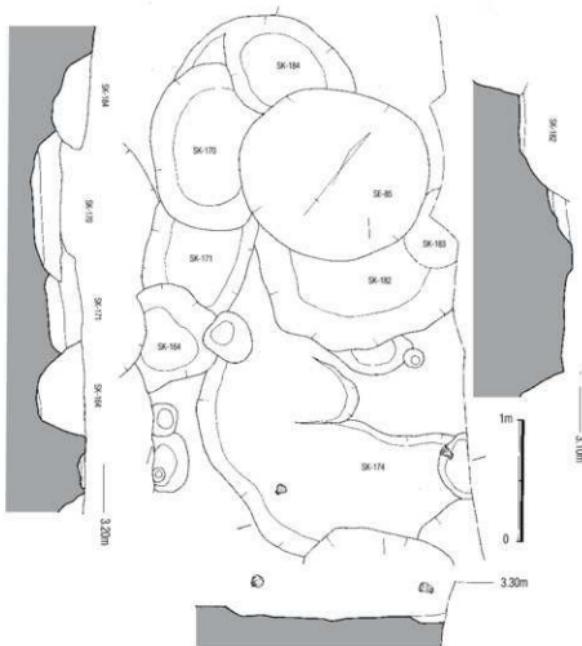


Fig. 45 遺構実測図 (S=1/40)

弥生土器壺底部片である。266はSK-155出土の須恵器蓋である。267はSK-155出土の弥生土器鉢である。277は弥生土器壺胴部片である。

SK-168 (Fig.9)

2区第3面で検出した長方形土坑である。SE-177の井筒方向に伸びる遺構であり、井戸遺構に間接する排水遺構であった可能性が考えられる。

出土遺物をFig.46に示した。240は糸切りの土師器坏である。241は白磁玉縁碗である。

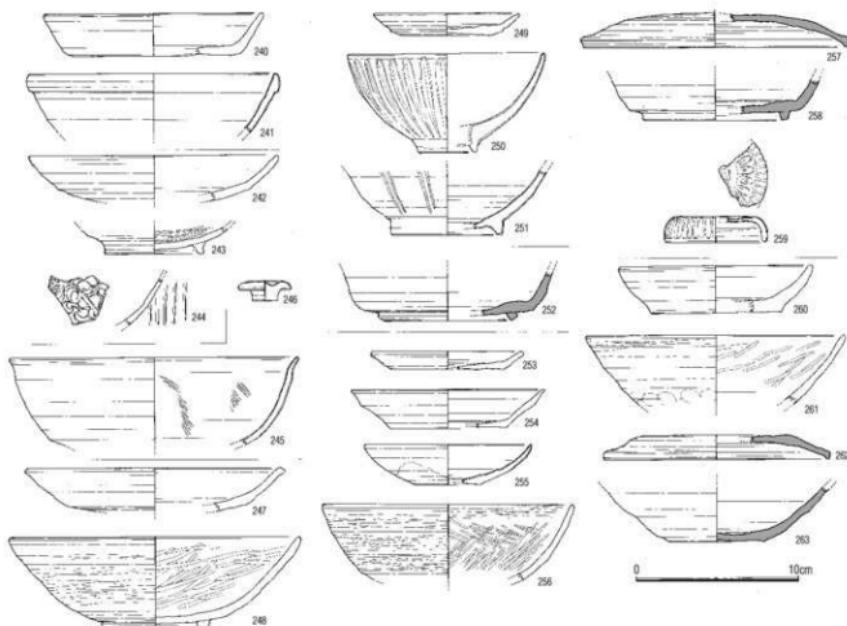


Fig. 46 出土遺物実測図 (S=1/3)



Ph. 47 SK-174 遺物出土状況 (南から)



Ph. 48 SK-174 遺物出土状況・部分 (西から)

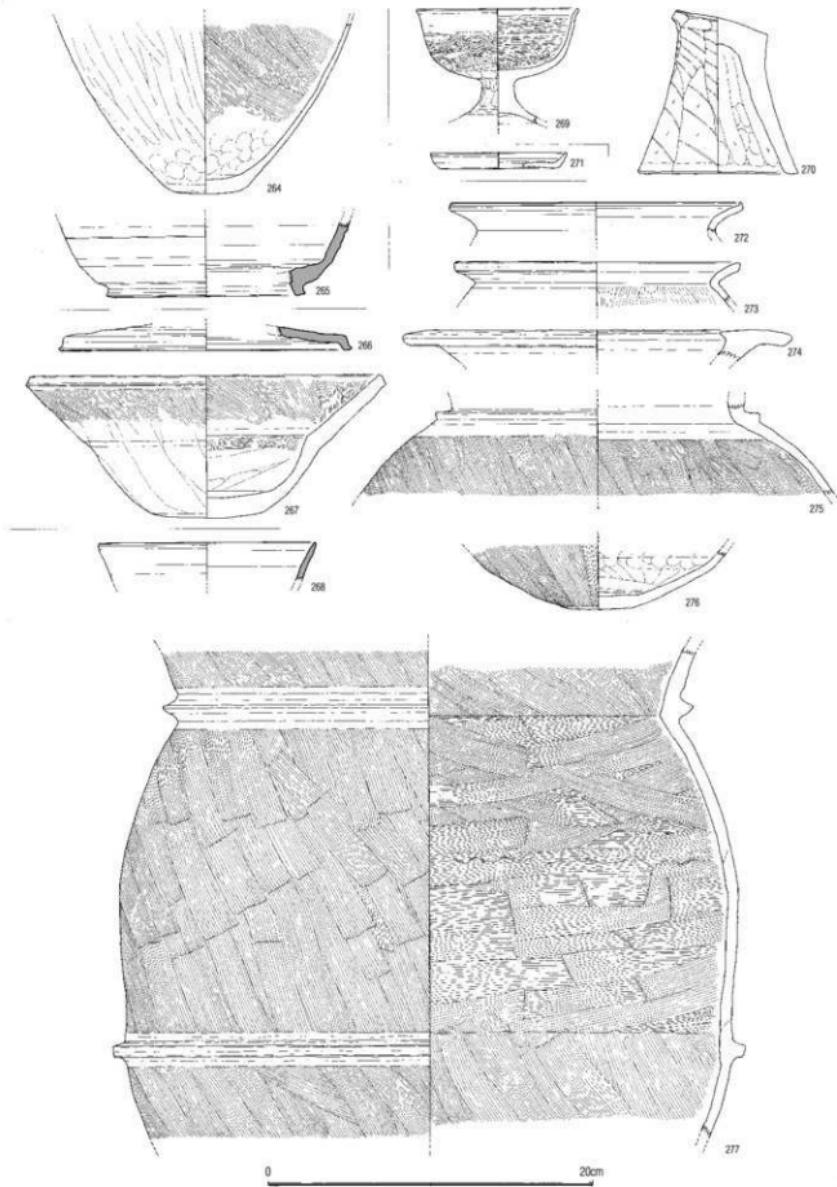


Fig. 47 出土遺物実測図 (S=1/3)

SK-302 (Fig.10)

3区第3面で検出した円形土坑である。長軸1.50mを測り、埋土は黒褐色土と褐色砂の互層となる。底面には周囲を巡るように浅い掘り込みが確認できるが、掘削時の工具痕か後世の植物痕跡なのかは判断できなかった。検出面から底面までは30cm程度の深さである。

出土遺物をFig.49に示した。278は白磁小碗である。279は白磁碗である。

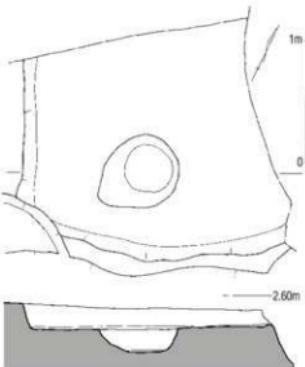


Fig. 48 SK-307 遺構実測図 (S=1/40)

SK-307 (Fig.48)

3区第4面で検出した方形土坑である。隅部を他の遺構に切られるため遺構全体の法量は判明しない。検出面から底面までは20cm程度の深さで、砂丘砂層中に掘削される。埋土は暗褐色砂を主体としており、埋土中より土師器・白磁・須恵質土器などが出土した。11世紀後半代の半地下式の倉庫か。出土遺物をFig.49に示した。280はヘラ切りの土師器小皿である。281はヘラ切りの土師器壺である。282は白磁碗である。283は青白磁の碗である。284は白磁玉縁碗である。285は備前焼の大甕である。

SK-169 (Fig.9)

2区第3面で検出した方形土坑である。遺構の大部分が調査区外へ伸びるため全容は判然としない

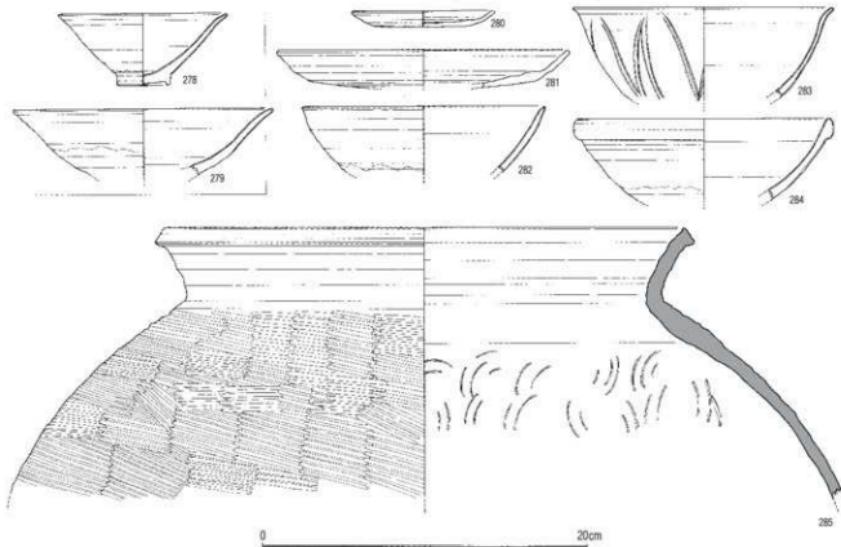


Fig. 49 出土遺物実測図 (S=1/3)

が一边3m以上を測る。検出面から底面までは50cm以上を測り、また底面が平坦面となることから堅穴住居である可能性が考えられる。重複するようにSE-177が掘削されているため、遺構内部の状況については不明確である。埋土より土師器・白磁・黒色土器などが出土した。出土遺物をFig.46に示した。242はヘラ切りの土師器壺である。243は瓦器椀である。244は耀州窯系青磁である。245は白磁碗である。

SK-170 (Fig.45)

2区第3面で検出した楕円形土坑である。長軸1.30mを測り、埋土は黒褐色粘質土を主体とする。出土遺物をFig.46に示した。246は白磁小壺蓋である。247はヘラ切りの土師器壺である。248は瓦器椀である。

SK-171 (Fig.45)

2区第3面で検出した土坑である。東側の一部を残して他の遺構に切られるため全容は明確でない。埋土は黒褐色粘質土を主体とし、検出面から底面までは25cm程度の深さを測る。土師器・貿易陶磁などの遺物が出土した。廃棄土坑か。出土遺物をFig.46に示した。249はヘラ切りの土師器小皿である。250は龍泉窯系青磁碗である。251は越州窯系青磁水注である。

SK-182 (Fig.45)

2区第3面で検出した不定形土坑である。第4面で確認した結果、方形土坑であることが判明した。検出面から底面までの深さは30cm前後をはかり、底面は平坦面となる。埋土からは土師器壺・須恵器碗などの遺物が出土した。SK-174と同様に古墳時代の堅穴住居である可能性が考えられる。

出土遺物をFig.47に示した。264は弥生土器壺胴部片である。265は須恵器脚付壺である。

SK-181 (Fig.9)

2区第3面南端部で検出した不定形遺構である。平面形は不明確で南側に向かって緩やかな窪みを持つ。埋土は暗褐色砂であり、砂丘砂層面上の底面には凹凸があり、鉄分沈着層が形成される。土坑などではなく、整地層の一単位である可能性がある。出土遺物をFig.46に示した。252は須恵器碗である。253はヘラ切りの土師器小皿である。254は糸切りの土師器壺である。255は白磁平底皿である。256は瓦器椀である。

SK-183 (Fig.45)

2区第3面で検出した遺構である。調査区壁断面で確認したため遺構の平面形は把握できないが、土層断面から直径60cm前後の土坑であることが推定できる。埋土は暗褐色砂質土で須恵器・土師器などの遺物が出土した。出土遺物をFig.46に示した。257は須恵器蓋である。258は須恵器碗である。259は白磁合子蓋である。

SK-184 (Fig.45)

2区第3面で検出した楕円形の土坑で、近世井戸(SE-85)によって一部が消失する。SK-170等と同様に廃棄土坑と考えられる。検出面から底面までは30cm前後で、埋土は黒褐色粘質土が主体となる。土師器・瓦器椀などの遺物が出土した。出土遺物をFig.46に示した。260は糸切りの土師器壺である。261は瓦器椀である。262は須恵器蓋である。263は須恵質土器の壺である。

4. その他の出土遺物

これまでの報告で触れられなかった遺物のうち、重要と思われるものについて簡単に説明を行いたい。なお、出土地点・器種は図中に示した。

a. その他の出土遺物 (Fig.50・51・52)

286は白磁口禿皿である。287は青白磁の口禿皿である。295はガラス玉である。3区第1面遺構検出時に出土したもので中世に属するものである。298～302は土鍤である。303は耀州窯系青磁碗である。304はヘラ切りの土師器坏である。復元口径は24.4cmと大きい。315は青白磁の香炉胴部片である。

327は龍泉窯系青磁碗で、内面見込みに「金玉満堂」をスタンプする。328は1区第2面下掘り下げ時に出土した東播系須恵器壺である。外器面には並行する叩き目が全周し、内器面には同心円文の当て具痕が観察できる。色調は灰色を呈する。

329～341は須恵器である。いずれも本来の遺構からは遊離しているもので、遺構面の掘り下げ時には多くの須恵器が出土している。341は復元口径26.0cmを測る鉢で、高台断面形は台形を呈する。本調査地点付近は古代の段階では「居住城」に比定される範囲であり、これに関連する遺物であろう。

344は弥生時代後期末の壺である。内外器面ともに刷毛目調整を施す。345は弥生土器壺口縁部片である。内面には暗文が残る。346は弥生時代の壺頸部片である。刻み目を持つ断面方形の突帯を貼り付ける。350は古式土師器壺である。口縁端部は面取りして平坦面を造り、条線を巡らす。体部は刷毛目調整を施す。351は2区SK-134から出土した土師器壺である。頸部には刻み目を持つ低い突帯を巡らせる。

352は2区SE-188掘方内の土坑（SK-187）から出土した土師器壺である。内外器面ともに刷毛目調整が施される。焼成は良好で色調は暗褐色を呈する。354・356～358は土師器壺である。

362・363は土師質土器の土鍋である。いずれも色調は暗褐色を呈し、体部には耳が貼り付けられる。364は3区SD-301出土の銅製の匙である。断面形は方形から円形を呈する。365は銅製の笄である。両端部を欠損する。366は滑石製石製品である。全体に調整痕が残り、穿孔される。

368は石製の硯である。部分的な出土であるため全体の形状は判然としないが上面・底面に擦痕が残る。369～372は砾石である。石材は砂岩系のものから粘板岩系のものと多様である。

b. 墨書土器 (Fig.53)

第186次調査では、28点の墨書土器が出土した。墨書部が完存している資料は少なく、判読不能な個体が多い。出土した器種の内訳は土師器7点、須恵器3点、貿易陶磁器類18点となり、白磁碗高台内に墨書きされた資料が圧倒的に多く出土する。なお、出土地点・器種は図中に示した。

373は須恵器碗で、高台内に「大」と墨書きされる。381は須恵器碗高台内の墨書きである。387は須恵器坏の底部の墨書きである。

374は土師器坏で、内面に墨書きされるが絵画なのか習字なのか分からぬ。386も内面に墨書きされる土師器坏であるが、判読できないものである。388は土師器である。用途不明の製品であるが、底部は糸切り調整され墨書きされる。389は白磁碗で高台内に「房」と墨書きされる。

判読できる文字としては「王」「綱」等がある。

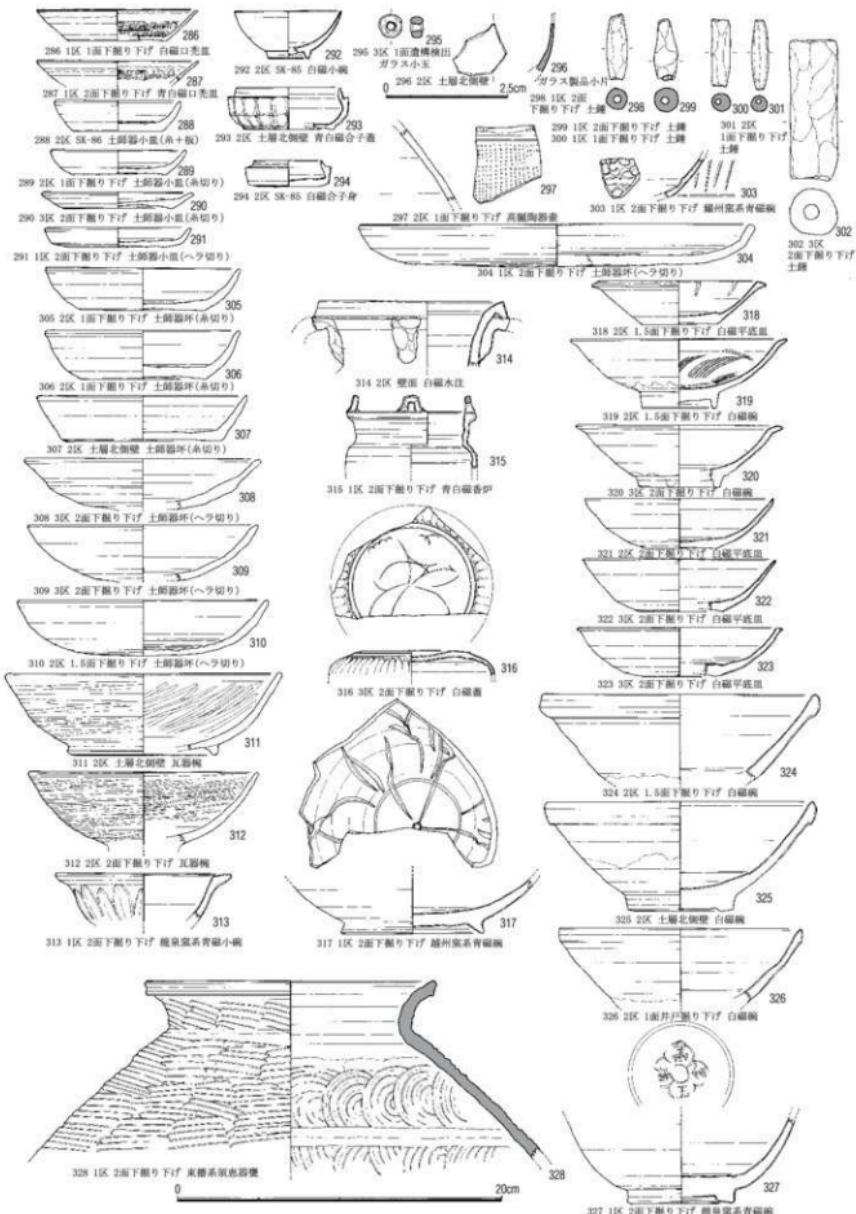


Fig. 50 その他の出土遺物実測図 1 (S=1/1・1/3)

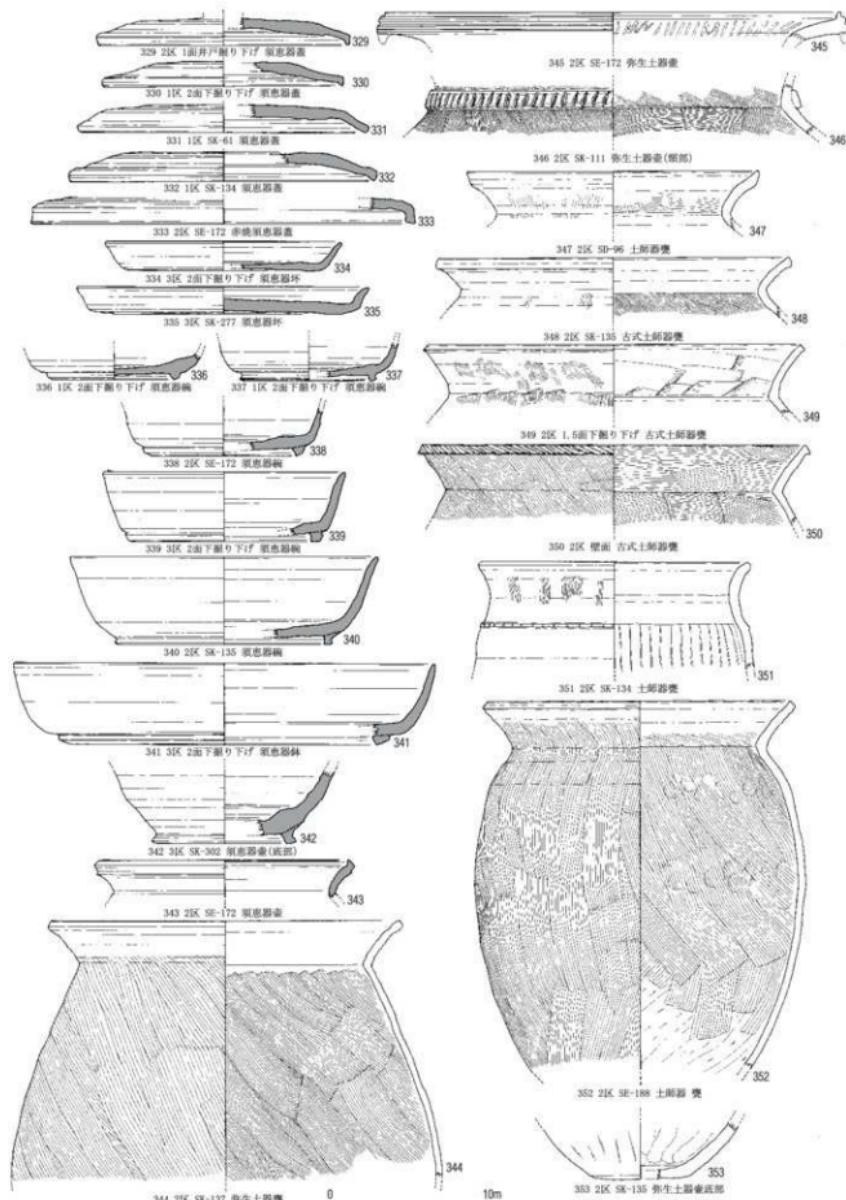


Fig. 51 その他の出土遺物実測図 2 (S=1/3)

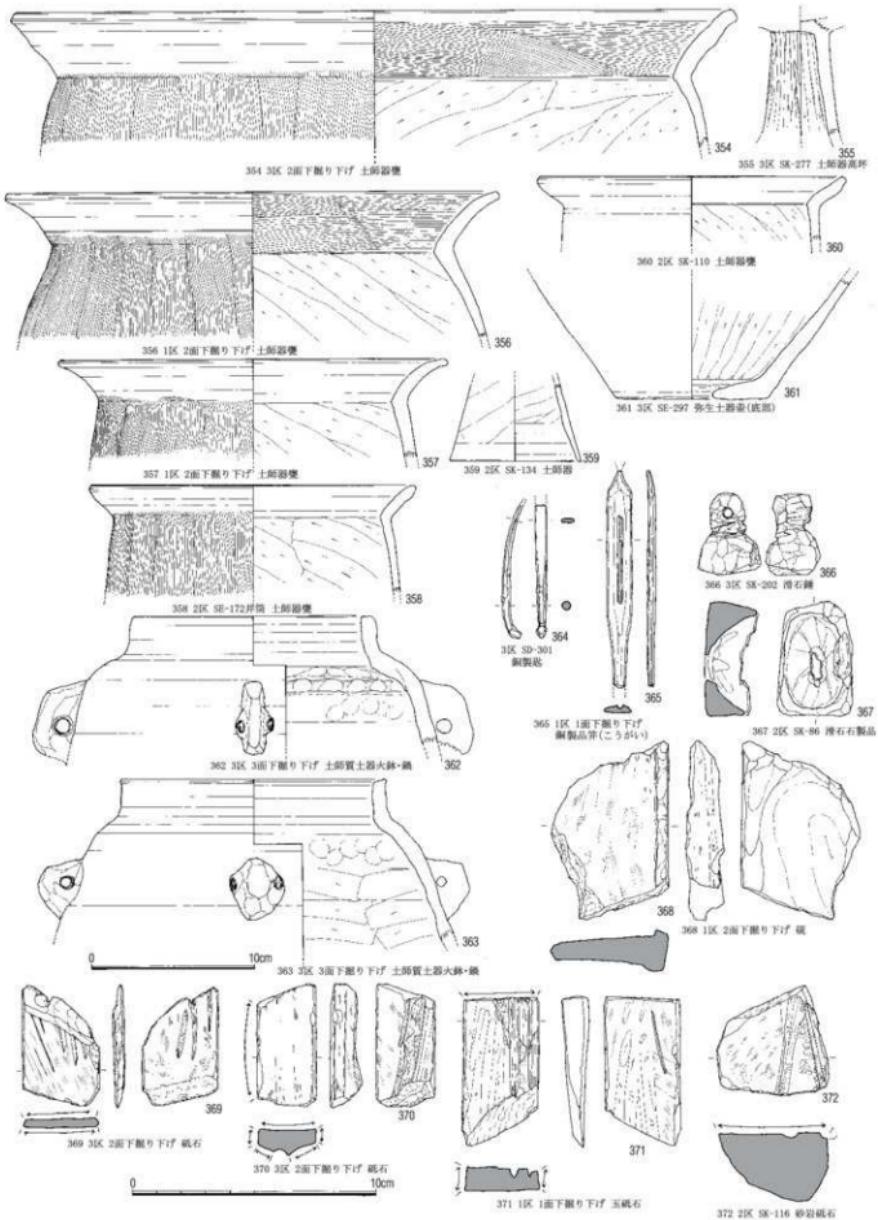


Fig. 52 その他の出土遺物実測図 3 (S=1/2・1/3)

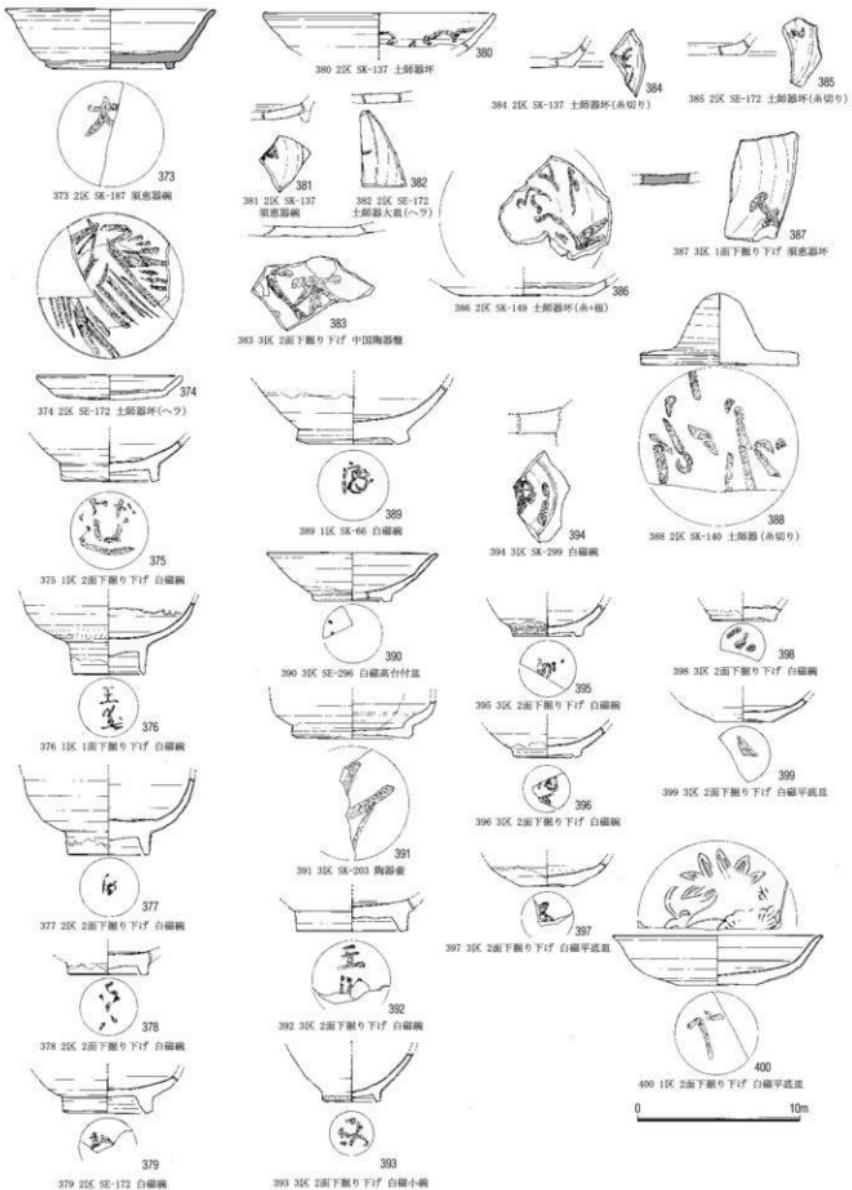


Fig. 53 墓書土器実測図 (S=1/3)

c. 銅銭 (Fig-54)

第186次調査では、総数36枚の銅銭が出土している。大半が遺構面の掘り下げ時に出土し、16枚については遺構から出土した。各区の出土状況をみると1・3区では遺構面の掘り下げ時に多く出土しており、2区では全て遺構埋土から出土している点で差異が見られる。特に1区では2面下掘り下げ時に多く出土しており、整地土層中に含まれていたものと考えられる。

出土遺構や銅銭の時期については、特に傾向はなく、多くが遺失銭という状況である。

判読結果よりTab.1 遺構別出土銅銭一覧表、Tab.2 西暦別出土銅銭一覧表を作成した。

区	面	遺構	番号	出土地点	銭貨名	判 認	枚数	備 考
1区	1面	SK	12		慶元通寶		1	折三 背面「五」
	1面			SPO1付近掘り下げ (遺構検出)	皇宋通寶		1	
	(1-2)		44		解読不能		1	
	(1-2)	SK	51		□(次)慶元通寶	熙寧元寶	1	
	2面下				政和通寶		1	
	2面下				祥符元寶		1	
	2面下			掘り下げ	慶元通寶		1	背面「二」
	2面下				近代銭		1	
	2面下				元豐通寶		1	
	2面下			掘り下げ (~2.8M)	開元通寶		1	
	2面下				解読不能		1	
	2面下				□(次)□		1	
	2面下			掘り下げ (~3.0M)	聖宋元寶		1	
				東側トレンチ	太平通寶		1	
2区					熙寧元寶		1	
					元符通寶		1	
					元祐通寶		1	
					嘉祐通寶		1	
			86		□(次)□		1	
		SE	85		開元通寶		1	
					元符通寶		1	
					元祐通寶		1	
					嘉祐通寶		1	
					□(次)□		1	
3区		SK	137		開元通寶		1	
		SK	170		元符通寶		1	
			204		解読不能		1	
		SK	212		□(次)宋通□(次)	熙寧通寶	1	
		SK	262		永樂通寶		1	
		SK	262		治平元寶		1	
		SK	262		聖宋通寶		1	
		SK	277		開元通寶		1	
	1面			遺構検出	大觀通寶		1	模跡銭
	1面				熙寧通寶		1	
1面	1面				永樂通寶		3	
	1面			東側掘り下げ	永樂通寶		1	
	1面				大聖元寶		1	
	1面下				元豐通寶		1	
	1面下			掘り下げ	大中通寶		1	模跡銭
	1面下				元祐通寶		1	
出 土 総 数							36	

□は、文字の有無は確認できるが、判読不能

□(次)は、欠損

Tab. 1 遺構別出土銅銭一覧表

銭貨名	西暦	王朝名	初鑄年	枚数	銭貨名	西暦	王朝名	初鑄年	枚数
開元通寶	621	唐	武德 4 年	3	元符通寶	1098	北宋	元符 元 年	2
太平通寶	976	北宋	太平興國元年	1	聖宋元寶	1101	北宋	建中靖國元年	1
祥符元寶	1009	北宋	大中祥符元年	1	大觀通寶	1107	北宋	大觀 元 年	1
天聖元寶	1023	北宋	天聖 元 年	1	政和通寶	1111	北宋	政和 元 年	1
熙寧通寶	1038	北宋	熙寧 元 年	4	慶元通寶	1195	南宋	慶元 元 年	1
嘉祐通寶	1056	北宋	嘉祐 元 年	1	折三銭				1
治平元寶	1064	北宋	治平 元 年	1	大中通寶	1361	明		1
聖宋通寶	1068	北宋	熙寧 元 年	2	永樂通寶	1408	明	永樂 6 年	5
元豐通寶	1078	北宋	元豐 元 年	2	大中 銭				1
元祐通寶	1086	北宋	元祐 元 年	1	解読不能				5
								総 数	36

Tab. 2 西暦別出土銅銭一覧表

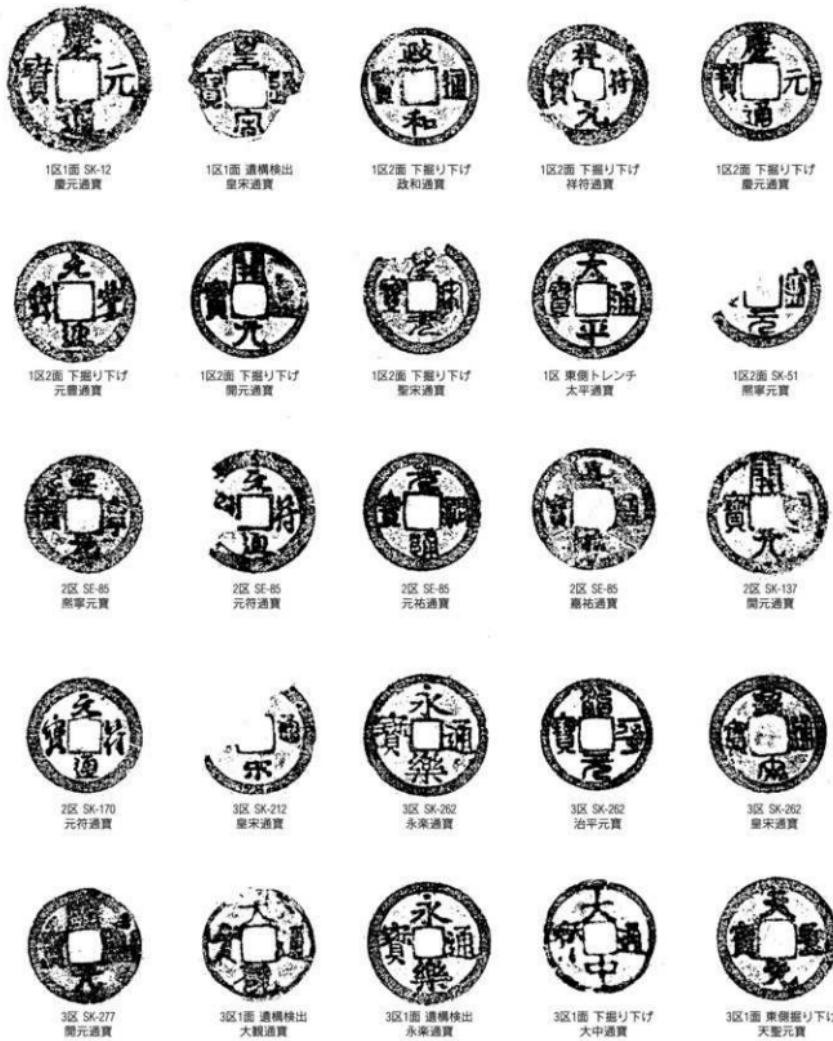


Fig. 54 銅銭 (S=1/1)

第三章 まとめ

以上簡単ではあるが、検出遺構、出土遺物についての説明を行ってきた。最後に第186次調査のまとめを行いたい。

掘削面積254.0m²の内実際に調査対象となったのは120m²程度となった。遺構・遺物の初現としては弥生時代中期末の土坑・土器であり、該期より博多濱の北西端部まで活動領域として取り込まれていたことが判明した。古墳時代については遺物のみが確認された。

古代の時期には規格的な大溝が掘削されており、これに規制される街区が中世期まで存続していることが確認された。このような古代から中世まで連続する町割りが存続している地点は博多遺跡群内では複数確認されており、古代以来の街区が維持される何らかの規制などの背景が存在していたものと推測される。また、多角形を呈する井戸遺構から出土した銅製巡方は官人階級がこの一帯にも存在していたことを示唆するものであろう。遺物は総数で53箱分が出土した。以下に各時代の調査成果を簡単にまとめをおこなう。

弥生時代・古墳時代

第186次調査では前述のように弥生時代中期末の土坑を初現として古墳時代の遺物が多く出土している。調査区北側で実施された第162次調査では、弥生時代終末期に位置づけられる甕棺墓が検出されている。博多濱の北側砂丘周辺（冷泉町周辺）の調査成果を概観してみると、弥生時代終末期から古墳時代初頭に遡る遺構としてはこのような単独で検出される埋葬遺構が多く見られる。遺構としての掘削深度が深いため、住居・土坑等の生活遺構と比較して遺存しやすいということもあるが、この段階では集落の中心は博多濱南側砂丘上に展開していることが知られており、集落縁辺部を選択して墓域を形成した可能性が考えられる。

博多濱北側砂丘列は現在の店屋町・冷泉町・上呉服町付近に形成された砂丘であるが、弥生時代中期・後期の遺物・遺構が検出されるのは冷泉町・上呉服町周辺に限られる。この段階では店屋町付近では砂丘が未発達な状況であったらしく、古代以前の遺構は検出されない。冷泉町・上呉服町周辺では実際に生活空間として利用可能な環境になるのは弥生時代前期後半～中期初頭頃と考えられる。同一砂丘上の環境差は、前面の海浜部に形成される微高地地形によって生じたものであることが考えられ、砂丘前面の両端部に何らかの要因で形成された微高地地形が海からの直接の風濤を防ぐ障壁の役目を果たし後背地が形成され安定した環境となったのであろう。

なお、博多濱を形成する二つの砂丘列は現在独立した砂丘地形のように見えるが、本来は博多湾岸に形成された一連の砂丘地形で、博多濱砂丘北側列は箱崎遺跡が展開する砂丘列、南側砂丘列が吉塚遺跡が展開する砂丘列に対応する。博多遺跡群の展開する砂丘列が現在のような独立した地形になるのは16世紀中頃に石堂川が開鑿された後で、それ以前は連続する砂丘地形であったことは各時代の遺構分布状況を考える上で忘れてはならないことである。

古代

本調査で検出した古代に属する遺構の中で最も顕著なものはSD-301とした区画溝である。検出した範囲からN-63°～65°-Eの主軸方向を探ることが分かる溝で、8世紀代に掘削された遺構である。今回の調査成果からは8世紀代から12世紀代まで存続し、埋没後も太閤町割直前まで周囲建物主軸がこれを踏襲するなど大きな影響を与える遺構であったことが判明した。では調査区周辺で検出される同時期

の遺構との関係はどうなるのか。前述の第162次調査では8世紀代を年代の上限とする溝が検出されているが、この主軸はN-48°-E方向を探り、SD-301のそれと大きく異なる。本調査点南西側に位置する第139次調査で検出される8世紀代の溝遺構はN-74°-Eの方向を探り、わずかに東側に振れる。なお、上面で検出される中世後半期の溝遺構はN-65°-E、またはこれに直交する方位を探るものが多く、本調査区で検出される遺構群とほぼ同主軸を探るものが多いことが分かる。

さらに大きな範囲でこのような主軸方向を持つ遺構を見てみると、本調査区より西側部分ではN-65°-E前後の方向を探るものが多く、東側では現在の町割りに近いN-48°-E前後の方向を探るものが多いことが分かる。これまでの調査成果からは古代の時期の博多漁には大きく分けて三つの群に分けられる遺構群が存在していることが知られている。ひとつは博多漁南部に展開する「官衙城」であり、博多漁西側に展開する同一主軸の遺構群を「港湾城」、博多漁中央部から北側にかけて展開するものを「居住城」と区分している。これらの異なる主軸を持つ遺構群は部分的ではあるが8世紀代から14世紀代にかけて存続するものであることが知られており、本調査区で検出したSD-301も「港湾城」の主要な区画溝の一つであった可能性が考えられ、第162次調査で検出される溝は「居住城」を構成する溝の一つであろう。

「官衙城」と称される範囲は南北・東西方向の主軸を探る遺構群で構成されるが、本調査地点が含まれる「港湾城」や「居住城」では、地形の傾斜に則した主軸方向で遺構群が構築されていることが推測されている。地形の傾斜に直交・平行する方向で区画溝を設け建物などの遺構群が展開していくのであるが、砂丘地形内には鞍部や谷地形がいくつも複雑に入り込んでおり、これを維持・拡張するのは大規模な造成を伴うものであり、主軸方向の初現となった主要施設の影響が大きく反映された結果なのかもしれない。

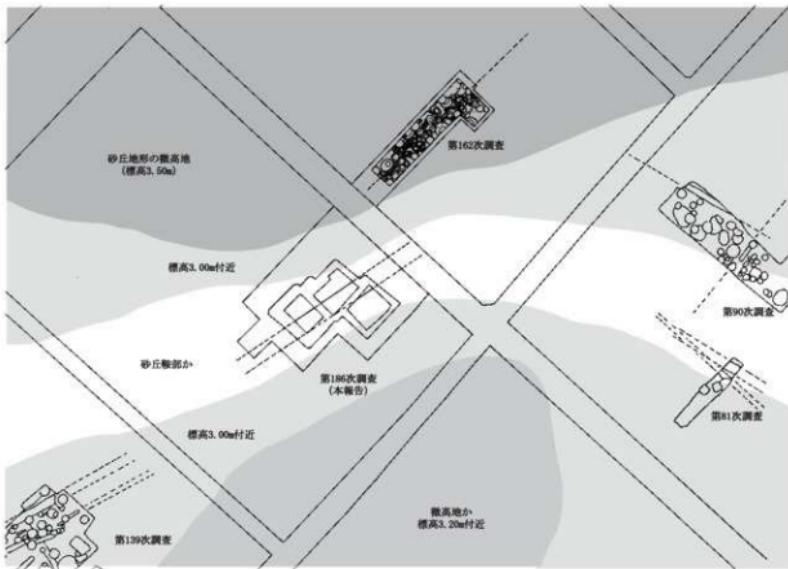


Fig. 55 周辺遺構配置図・古代 (S=1/1,000)

中世

中世の段階においても町の区画自体は大きく変化していないことが各造構面の調査から分かる。第1・2面の調査成果からはほぼ同一主軸の造構群が連続して建て替えられている状況が見られる。調査面積が狭いために建物配置や敷地の変遷を捉えることはできなかったが、16世紀末の太閤町割直前まで連續と続く町並みが復元できよう。

各調査面の掘り下げ状況から調査区の北側範囲については13世紀以降は密集した町屋の一部となっていた可能性が考えられる。これはそれ以前の12世紀代に連続して掘削されていた井戸造構が全く維持・管理されなくなっている状況から推測されるもので、居住層も大きく変化したことが考えられる。12世紀代までは比較的豪奢な貿易陶磁等の出土遺物が見られるが、それ以後は遺物の種類も出土量も大きく減少することから宋商人の居住空間から日本人居住区に変化したことを示すのであろう。

14世紀代には再び大きな屋敷内に取り込まれたのか、造構の密度は薄くなり何の造構も掘削されない整地層が見られるようになる。溝で区画された庭なのか。小規模ながら土師器廃棄土坑が見られることも豪華を行う身分の居住者が存在していたことを示す資料である。15世紀代の造構はほとんど報告していないが、それ以前の造構と同様にN-65°-E方向の主軸を踏襲して営まれている。この時期の青磁碗などを第1面造構検出時に確認している。このような継続された町割りが断絶するのは太閤町割によってであり、調査区付近の町並みは大きく一変したのであろう。博多の町並みの中には、それ以前の町並みを保つ場所が數ヶ所見られるが本地点はこれに該当しない。

以上、本調査の簡単なまとめを行った。今後の調査で、都市「博多」がより一層解明されることに期待したい。

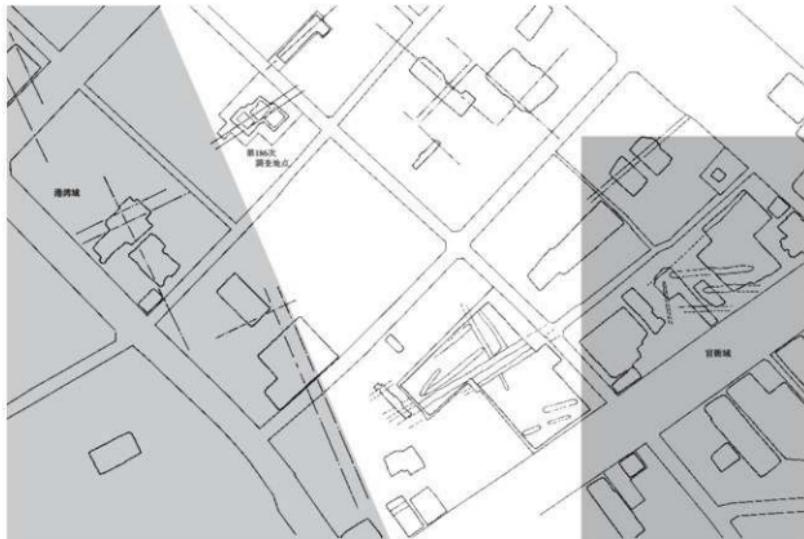


Fig. 56 周辺造構配置図・中世 (S=1/2,000)

報告書抄録

書名	博多 はかた139		
副書名	博多遺跡群第186次調査報告		
卷次			
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	第1090集		
編集者名	本田浩二郎		
発行機関	福岡市教育委員会		
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667		
発行年月日	2010(平成22)年3月23日		
調査期間	2008.10.01 ~ 2008.12.18		
調査面積	120.05m ²		
調査原因	共同住宅建設		
所取遺跡名	博多遺跡群 はかたいせきぐん		
所在地	福岡県福岡市博多区冷泉町400-2外		
市町村コード	40130	遺跡番号	0121
北緯	33°35'41"	東経	130°24'39"
種別	集落	主な時代	古代／中世
主な遺構	井戸12／土坑／区画溝／柱穴列		
主な遺物	弥生土器／古式土師器／土師器／須恵器／貿易陶磁器／国産陶器／銅錢など		
特記事項			

博多 139

— 博多遺跡群第186次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1090集

2010年3月23日発行

発行 福岡市教育委員会

印刷 城島印刷株式会社

福岡市中央区白金2-9-6

